

目 次

【I】 各教科領域別研究内容

I 国 語 科	143
II 社 会 科	146
III 算数・数学科	149
IV 理 科	152
V 音 楽 科	156
VI 図画工作・美術	158
VII 体育・保健体育科	159
VIII 技術・家庭科	163
IX 英 語 科	166
XI 道 徳	167
XII 学 校 保 健	170
XIII 幼 児 教 育	172
XIV 学 習 評 価	175
XV 書 写 ・ 書 道	178
XVI 教育と福祉	179
XVII 生活・総合	182
XVIII 情 報 教 育	187

【II】 各附属学校・園の研究内容

世田谷小学校	189
小金井小学校	190
大泉小学校	191
竹早小学校	192
世田谷中学校	193
小金井中学校	194
国際中等教育学校	
・大泉中学校	195
竹早中学校	196
高等学校	197
国際中等教育学校	
・高等学校大泉校舎	198
特別支援学校	199
幼稚園（小金井園舎）	200
幼稚園（竹早園舎）	201
附 記	
附属学校研究員一覧	202

【I】 各教科領域別研究内容

I. 国 語 科

1. 国語部全体の研究主題

「国語科の新しい授業作りの視点」

1. 1. 研究の経過

4月23日(水)地区会① 5月28日(水)国語部全体会(小金井小学校) 6月25日(水)全体会
9月17日(水)地区会② 10月22日(水)地区会③ 11月19日(水)国語部全体会(研究授業/小金井小学校)
1月28日(水)地区会④ 2月25日(水)国語部全体会(小金井小学校)

2. 各地区の研究

2. 1. 世田谷地区の研究概要

2. 1. 1. 研究の主題

国語力向上を図る学校カリキュラム作成に関する基礎的研究 ～国語科の新しい授業づくりの視点～

2. 1. 2. 研究のねらい

附属合同研究会研究プロジェクトの第二年次である。昨年度の研究をふまえ、今年度は実践を積み重ねていき、授業づくりの新しい視点の検討をねらいとしている。

2. 1. 3. 研究の内容と成果

課題別に構成したグループごとに、第一年次に見出された成果や課題に対して、具体的な実践を通して検討をしていくこととした。

A 目標論的な追究のグループ：それぞれのグループの実践を整理し、国語としての力を価値づけていった。そして昨年度作成した「発達段階に応じた国語力育成のモデル」を立体的にし、多角的に国語力を捉えることができた。

B 内容論的な追究(古典・文学・言語etc...)のグループ

B-1【古典】：昨年度検討した、古典学習における実態と問題点をふまえ、中学・高校で実践を行った。そこから、今後の古典学習取り組みにおける展望を見出すことができた。

B-2【文学・論説】：価値ある<抵抗>をキーワードに教材を選定し、5つの実践に取り組んだ。あえて、比較的理解が難しいと思われる教材を用いて、学び手の読解力育成を目指し、成果を挙げることができた。

B-3【言語生活・言語体系】：附属大泉小学校の帰国学級での日本語指導に関する活動を検討した。そこから言語能力の発達を個人レベルで捉えることの重要性を再認識し、今後の研究に向けての観点が見出された。

C 方法論的な追究【小・中・高の関連・情報活用能力と国語力】：校種による読書記録蓄積の活用の可能性をさぐった。中学校で実施している読書ノートオンラインシステムについて、実践を通して、さらなる充実を図ることができた。

2. 1. 4. 研究の課題

教員養成をという視点に立ち、今後の研究を進めていくことを視野に入れている。各グループの成果を、その観点からも関連付けていく必要がある。来年度が3年計画の最終年次である。(文責：福田淳佑)

2. 2. 竹早地区の研究の概要

2. 2. 1. 研究主題

豊かな伝え合いをめざして－話す・聞く活動の小中連携カリキュラム作り－

2. 2. 2. 研究のねらい

竹早地区では、主体性を育む幼・小・中連携の教育に取り組んでいる。昨年度は、伝え合う力・コミュニ

ケーション能力の育成に中学校英語科と共に取り組んできた。今年度は、国語科の中でも、全ての教科学習を成立させるための学習能力である「話す・聞く」活動に焦点化し、11年間の子どもの育ちを見据えた小中連携カリキュラムの作成することをねらいとしている。

2. 2. 3. 研究の内容と成果

「話す・聞く活動の小中連携カリキュラム」を作成するにあたって、小学校2年生を対象とした研究授業をおこなった。(小学校授業 9月19日(金)2年生「夏休み発表会」宮崎佐智子)授業では、夏休みの楽しかった出来事を、クラスの友達に話すことで、自信を持ち、活動に主体的に取り組んでいく子どもの姿が見られた。1年生の時から共に育った信頼しあう人間関係に支えられ、2年生の子どもたちは、たっぷりと思いを友達に語る事ができた。また、聞く側の子どもたちも、仲良しの友達がうれしそうに語る思い出を、自分のことのように味わい、楽しみながら真剣に聞いていた。

講師には東京学芸大学名誉教授田近洵一先生を招き、ご指導をいただいた。2年生2学期初期の子どもたちには、身近なことや経験したことなどを、親しい人たちに話す経験は重要であること、今後は関心のあることなどを調べ、理由や事例を挙げながら筋道を立てて話すことにも取り組ませていくことなどをご指摘いただいた。

この結果を生かし、「聞く・話す活動の小中連携カリキュラム」を作成した。作成したカリキュラムは、2月14日の公開研究会にて発表した。

2. 2. 4. 今後の課題

今後は、「読む」「書く」など国語科の他の領域のカリキュラム作成に取り組んでいきたい。そして、幼稚園から中学校までの11年間の子どもの育ちを見据え、小学校と中学校で連携し、竹早地区の教育を進めていきたい。また、今年度作成した「話す・聞く活動の小中連携カリキュラム」を実践し、実際にどういった効果が得られたのかを明らかにしていくことも課題としたい。(文責：浅見優子)

2. 3. 大泉地区の研究概要

2. 3. 1. 研究主題

「学校ごとの課題に応じたカリキュラムの作成と実践」

2. 3. 2. 研究のねらい

大泉地区では、学習指導要領の改訂と、国際中等教育学校を中心とした学校改革に伴い、各学校の国語科カリキュラムを見直し、その作成と実践に取り組むこととした。その上で、附属大泉小学校、附属国際中等教育学校(含む、附属大泉中学校、附属高校大泉校舎)、附属特別支援学校、相互に関連する内容を見出し、将来の連携した学習の展開へつなげていくことも見通していきたいと考えている。

2. 3. 3. 研究の内容

本年度の大泉地区では、4月に行った地区の研究テーマを決める内容の地区会を含めて、4回の地区会を行うことができた。2回目以降のそれぞれの地区会の内容は、次のようなものであった。

9月の地区会では、小学校と中学校のそれぞれの学習指導要領について、新指導要領における改訂内容についての確認を行った。教科全般にわたっての充実がうたわれている言語活動の充実を、地区としてどのように捉え、カリキュラムに具現化していくかが課題の一つとして挙げられた。また、伝統的な言語文化については、特に扱う内容について、小学校と中学校の間で関連をもたせる必要が見出された。

10月の地区会では、附属特別支援学校の実践をもとに、コミュニケーション力育成の視点に立って、カリキュラムづくりの視点について考えた。余暇支援、生活支援、就労支援、学習支援と密接に関連するコミュニケーション支援について、個別教育計画の内容や、指導目標として挙げられているコミュニケーションスキルの提示があった。

1月の地区会では、附属大泉小学校のコミュニケーション力育成カリキュラムについての提案が行われた。「自分を伝えるスキル」「相手を分かるスキル」「関係を調整するスキル」の3つのスキルを、話し合いコミュ

ニケーションスキルとして挙げ、そのスキルを育成する教科として国語科の話すこと・聞くことの指導時間の一部を充て、スキルを活用する場として教科や総合の時間を充てるという提案について協議を行った。

今後の大泉地区の課題は、言語活動の充実、伝統的な言語文化、コミュニケーション力のそれぞれについて、各附属学校に共通の視点を設け、カリキュラムの関連を具体的に図っていくことである。

(文責：上田真也)

2. 4. 小金井地区の研究概要

2. 4. 1. 研究主題

「確かな受容から始まる説明的文章の読み」

2. 4. 2. 研究のねらい

説明的文章の「読み」について、個々の教材をこえた「読みの技能」を設定し、発達段階にそくして配列し指導・検証する。

2. 4. 3. 研究の内容

上記テーマによる2年次の研究活動として、昨年度までに整理分類した「説明的文章の読みの視点」をもとに、できることから授業実践を行い、発達段階のそくした指導項目配列のための資料を得ることを目指した。

以下に示す「説明的文章の読みの観点」は、小金井小学校国語部作成のものである。

○説明的文章の読みの観点

- A 情報・・・(題材、事例、事実と意見 等)
- B 構成・・・(順序、段落、段落構成、序論・本論・結論 等)
- C 表現・・・(語・語句の説明や使用、接続語、文末表現、文体、図表 等)
- D 筆者・・・(論理・認識、思考、思想、主張、人柄、人間性 等)

これらの観点は、指導者が学習活動を構想、実践する際に中心的な学習事項として設定すると同時に、学習者である児童生徒にも積極的に示し、意識化させていくことをねらっている。

今年度の授業研究は次のとおりである。

・11月19日(水)附属研究会国語部会(授業研究会)

きみが筆者だ!～第2巻 こん虫・植物記～「自然のかくし絵」小学校3年生 吉永安里教諭

・2月13日(金)小金井小学校研究発表会

くらべてよもう「どうぶつの赤ちゃん」小学校1年生 大塚健太郎教諭

おもちゃのせつ明書を読もう「うごく虫を作ろう」小学校2年生 細川太輔教諭

きみが筆者だ「すがたをかえる大豆」小学校3年生 吉永安里教諭

筆者にせまろう「『便利』ということ」小学校4年生 片山順也教諭

あなたならどう読む?「インスタント食品とわたしたちの生活」小学校5年生 片山守道教諭

筆者の説明の工夫をとらえよう「人類よ 宇宙人になれ」小学校6年生 川畑秀成教諭

なお、中学校では、今年度に限り新学習指導要領で新設(再編)された「伝統的な言語文化と日本語の特質に関する事項」の指導のありかたについて、小・中学校の関連指導を中心に模索することに研究をシフトし、11月21日(金)に石井健介が「漢文入門」の研究授業をおこなった。

2. 4. 4. 成果と課題

先述の「説明的文章の読みの観点」を学年の発達段階にそくして配列し、教材ごとの扱い方を構想するための資料は集まりつつあるが、今後さらに実践を重ねる中で適切な学習活動として具体化していくことが求められる。また、小・中9年間を見通した指導の構想が必要である。

(文責：石井健介)

Ⅱ. 社 会 科

1. 世田谷地区 研究報告

1. 1. 研究テーマ 領域別学習における小中高社会科カリキュラムの研究

1. 2. テーマに関して

一昨年度、本地区では、「共生」というキーワードを主題として掲げ、各校種における共通教材作成の可能性を検討した。昨年度は引き続き「共生」という主題を掲げつつも、それぞれの校種の発達段階に応じた教材で授業実践をおこなった。本年度は「共生」学習が12カ年を通して導く認知・認識力、あるいは学習者自身の行動への影響を検討の主眼とし、「共生」に関わる5つの認識領域を設定し、各学年・教科それぞれの各領域における実践を系統的に抽出・分析し、小中高でのカリキュラムの検討を開始した。

1. 3. 研究の経過

第1回	4月23日	地区会（小学校）	本年度の活動計画検討（小）
第2回	5月28日	地区会（高校）	竹早実践例学習会 過去の世田谷地区一貫カリキュラム成果の共有
第3回	6月25日	附属研全体会	
第4回	9月17日	地区会（中学校）	研究実績の再検討とカリキュラム編成の方向性について
第5回	10月22日	地区会（小学校）	領域別授業実践一覧表検討
第6回	11月19日	地区会（高校）	領域一覧の分析と実践カリキュラム表作成方法の検討
第7回	1月28日	地区会（中学校）	カリキュラム表作成開始
第8回	2月25日	社会科部全体会	

1. 4. 成果

前年度の「共生」という共通テーマの研究をふまえ、発達段階の認識における教材研究の方向性の特徴の一つとして、共感（小）→客観（中）→多元的、構造的（高）という過程が抽出された。一方で「共生」の教材検討の中から、他者の工夫や努力を無条件に尊重することが、時に違いの是正、同一空間・事象・目標への協調を希薄化させる可能性、すなわち調整放棄の行動につながる可能性が存在するという分析もなされた。このような課題を踏まえ、「共生」という主題が、12カ年という長期的なスパンの経緯をふまえ、どのような社会認識を形成し、結果としてどのような学習者の行動へのつながりを生じていく可能性があるのかという点についての検討の必要性が指摘された。このような経緯をふまえ、「求められる認識・認知」を主眼に、12年の実践の再検討の試みとして、「人権」「国際理解」「環境」「平和」「地域」の五領域を設定し、各校種・学年・科目において領域別実践一覧表を作成し、それぞれの領域で、どのような深まりが生じていくのかを分析した。

2. 小金井地区（附属学校研究会 小金井地区 平成20年度研究のまとめ）

2. 1. 研究テーマ

「地域学習で児童・生徒に身につけさせたい力 ～地域認識の調査を生かした授業づくりに向けて④～」

2. 2. 研究テーマ設定の理由

小金井地区では、これまで児童・生徒の地域認識の深まりについて、継続的に研究を推進してきた。今までの取り組みとしては、①小金井市の水と緑についての学習資料の作成、②児童・生徒の通学範囲にある市区の地域素材情報マップの作成、③児童・生徒の地域に対する意識調査を行ったりしてきた。このような取り組みを通して、「児童・生徒の社会認識は、自分たちが住んでいる場所については、具体的なイメージの希薄さが指摘され、さらに日々通っている学校の所在地である小金井市についての社会認識も曖昧なものであり、またそれは学年が進行していくにしたがって改善されるものではない」という問題意識が生まれた。そこで小金井地区では、地域学習の指導内容と指導方法の具現化をめざして研究を進めてきた。昨年度は、地域の学習素材

の発掘及び実地調査などを通して、教材の可能性や教材研究を深めてきた。今年度は、地域学習の内容は引き続き検討するとともに指導方法についても具体的に事業実践を通して検討をふかめていくことにした。

2. 3. 研究の方法

- ・地域素材の発掘や実地調査による地域学習の内容の検討
- ・授業実践を通して、小中における指導方法の検討

2. 4. 研究の経過及び概略

- 4月23日：第1回地区会 テーマ・内容検討
- 5月28日：第2回地区会 各校の研究内容報告・テーマ、内容の検討
- 6月25日：全体会
- 9月17日：第3回地区会
- 10月22日：第4回地区会中学校での授業実践と協議
- 11月19日：第5回地区会小学校での授業実践と協議
- 1月28日：第6回地区会今年度のまとめと課題
- 2月25日：附属学校合同研究部会社会科部

2. 5. 研究の成果と課題

今年度は、研究の成果としては、小学校・中学校での授業実践とその後の協議を通して、有効な共通の指導法や発達段階に合わせた指導法の違いについて検証できた。小学校では、地域の「ひと」とのかかわりから地域を認識させることが重要であること、中学校では、地域認識を深める教材の吟味が重要であることがわかった。課題としては、地域認識を深める資料や教材を活かした地域学習計画の検討や、授業実践が確かに地域認識を深めているのかの分析について今後取り組んでいきたい。 (文責：小金井小学校 小倉勝登)

3. 大泉地区研究報告

3. 1. 研究テーマ 「大泉地区で求める生徒・児童像」

3. 2. 研究の目的

大泉地区では「国際」をキーワードとした改革が行われている。2年前に国際中等教育学校が設立し、小学校でも改革が進められている最中である。このような状況下、大泉地区で求める生徒像、児童像を明らかにすることで、「国際」というテーマの元、教育活動が行っていけると考えた。

3. 3. 研究の経過

- 第1回 4月23日(水) 地区研 今年度の研究テーマと年間計画の設定
- 第2回 5月21日(水) 地区研 小学校社会科における能力、意欲・態度の考察(新聞作りを通して) 観察対象児の設定(小学校での社会科見学、作品作り、授業態度から)
- 第3回 6月25日(水) 附学研全体会(大学)
- 第4回 9月17日(水) 地区研 中学校・中等教育学校における実践報告 「プレ・イマージョン『アフリカとのつながりを感じよう!』」
- 第5回 10月22日(水) 地区研 高等学校地歴公民科における実践報告「社会科見学の成果と課題」
- 第6回 11月19日(水) 別日 国際中等教育学校、大泉小学校の研究発表会参観に変更
- 第7回 1月28日(水) 1年間の研究を振り返って 来年度の研究の見通し
- 第8回 2月25日(水) 全体社会科部会

3. 4. 成果と課題

昨年度末の申し送り事項の中で、「国際中等教育学校が求める生徒像を地区の部員間で共有する」ということ。そして、「小学校と国際中等教育学校が連携をし、12カ年の生徒・児童の追跡調査を行っていくこと」が挙げられた。この2項目に対して、本年度は取り掛かることが出来た。

- ・前者については、本年度、大泉地区のテーマに設定して、生徒・児童像を模索し始めることができた。各学校からの様々な提案によって、角度を変えながら、少しずつ目指すべき生徒・児童像が見え始めてきた。来年度、より具体的な生徒・児童像を提示し、目指すべき生徒・児童に向かった学習を検討していきたい。
- ・後者については、現在の中学一年生段階を対象に、追跡調査の対象を設定できた。小学校での生徒の作品や、授業時の様子を報告しながら、現在の様子を比べて、追跡調査の生徒の変化を探っていくことが出来た。引き続き来年度も、継続して追跡調査を行っていく予定である。

4. 竹早地区研究報告

4. 1. 研究テーマについて

竹早地区では「主体性」を育む幼小中連携の研究に取り組んでいる。本年度は小中連携カリキュラムの作成の布石として、地理・歴史・公民の各単元別に重点項目を設定し、これまでの小中の授業実践の成果と課題を総括することにした。さらに小中で育てたい児童・生徒像の共有化を目指して検討を重ね、児童・生徒の発達段階に応じた認識の特色・指導の目標・指導の内容を抽出し、児童・生徒の確かな事実認識を土台にして、話し合いや討論の場面を通して互いの価値観がさらに深化、発展し、新たな価値観の獲得につながる過程を明らかにしながら、小中連携の教育の有効性を検証した。

4. 2. 研究の経過

- 4/23 年間予定の検討
- 5/28 小中連携カリキュラムの検討 連携の軸・分野別重点単元の検討
- 9/17 小中で育てたい生徒像の検討 中学校地理的分野授業実践の報告
- 10/22 各学年・各分野の指導の重点項目の検討 小中連携の共有軸の検討
- 11/19 小中のつながりを意識した指導の重点項目の検討 地理的分野・歴史的分野
- 1/28 小中連携カリキュラム試案の検討 歴史的分野“天下統一期”・地理的分野“身近な地域”“日本の産業”
- 2/14 幼小中連携公開研究会「主体性を育む幼・小・中連携の教育」
- 2/25 (社会科部会全体会)

4. 3. 研究の成果と課題

まず、小中で育てたい児童・生徒像の共有化については、小中のそれぞれの社会科の目標に照らして共通となる部分を抽出し、竹早地区における教育活動の特色を反映するために必要な要素をつけ加えながら、小中で目指すべき児童・生徒像を検討した。その結果、小中共に社会的事象を取り上げ、異なる立場からみる多角的な視点、様々な方法(資料・人など)で調べる追究活動を重視していく点などが共通の要素となった。そのうえで、小学校では具体的な事象を通して社会の仕組みや問題を追究することが重視され、中学校では、社会的事象を客体として単に対象化するのではなく、自らも社会の一員として、自分の生き方やあり方を考えることを目標として設定した。

次に小中連携カリキュラムの作成に向けて、これまで積み重ねてきた授業実践を児童・生徒の発達段階に応じて認識の特色・指導の重点・指導の内容の観点から分析し、地理的分野と歴史的分野における重点単元を設定して小中連携カリキュラム試案を作成した。例えば地理的分野における“日本の産業”では、小5と中1の認識の特色の違いをふまえ、小学校では身のまわりの商品に着目してそれらが日本に持ち込まれてくる過程を追究していく活動を展開し、中学校では様々な物資が日本に入ってくるだけでなく、世界各国が相互依存関係にあるという経済のグローバル化の様子を認識させるというように、小中の連携を強く意識したカリキュラムを構想した。

今後は、小中連携カリキュラムの社会科3分野における指導の重点項目をさらに拡充し、児童・生徒の発達段階に応じた適切な指導の内容と具体的な方法論の確立と教材開発に向けて取り組むことが課題となる。

(文責：竹早中学校 上園悦史)

Ⅲ. 算 数・数 学 科

1. 世田谷地区研究報告

1. 1. 研究主題

「小・中・高一貫における算数・数学の興味ある教材の開発」 —授業研究を通して—

1. 2. 研究主題設定の理由

世田谷地区では、小・中・高等学校における算数・数学の授業、および教材開発について、主として授業研究を中心に取り組んできた。今年度も、お互いの授業研究会、現職研修などに参加をし、それぞれの校種での算数・数学の授業のあり方について共通理解を図った。

また今年度は、それに加えて、新学習指導要領の告示等に伴う教育課程の改訂を鑑みながら、各学校段階での児童・生徒の興味ある教材について、それぞれの実態に応じた授業実践の報告と検討を行った。

1. 3. 本年度の研究

(1) 附属世田谷小学校

小学校においては、附属世田谷小より、小学4年の除法の意味から筆算への指導過程について提案があった。現実場面からの導入、除法の意味をふまえて筆算を「つくる」過程、子どもたちの様相、指導の在り方について討議がなされ、共通理解を図った。この他にも、世田谷算数夏期セミナー、世田谷算数授業討論会などを実施し、授業研究を通して、共通理解を図った。

(2) 附属世田谷中学校

中学校においては、2つの授業実践報告を提案し、その検討を行った。1つは、総合的な学習（テーマ研究）の中での数学の学習についての実践例と具体的な生徒の活動について、主として立体図形の興味深い題材の紹介とその実践、および生徒の活動のようすについて報告をした。もう1つは、中学校における数学的活動を充実させていく授業づくりとその教材についての発表がなされ、検討がなされた。この他にも、授業研究会などを実施し、授業研究を通して、共通理解を図った。

(3) 附属高等学校

高等学校においては、高校における興味ある教材の開発として、数列題材を使った興味・関心を高めるための教材の紹介と実際の授業のようす、そのレポート活動などについて発表がなされ、質疑および協議がなされた。

1. 4. 今後の課題

授業研究をとおして一貫カリキュラムを考えていくことは、今年度も有意義なものとなっている。とくに、実際の授業を通して、児童・生徒の実態と算数・数学の指導内容のあり方を考える機会は、今後とも附属研究会の中でも引き続き考えていきたい。また、算数・数学の興味ある教材の開発については、各校種の実践報告を通して、それぞれが担おうとしている児童・生徒の数学の力を知る機会となった。小学校は、日常生活から算数をつくり出す力、中・高等学校では数学的に考えることの楽しさ、大切さについて、それぞれ大事にしていくことへの共通理解が深まったと考えている。今後とも継続的に実施していくとともに、具体的な数学内容について、小・中・高等学校で一貫したプロジェクト研究への計画も考えていきたい。

2. 小金井地区研究報告

2. 1. 研究主題

「数学的表現力を高める指導の工夫（2年次）」

2. 2. 今年度の重点

授業研究を通して、子どもたちの表現力を高めることで思考力を高めていく。

2. 3. 研究の概要

(1) 実践事例① 小学校第3学年 「わり算」(8月23日実施) 授業者：高橋 丈夫

整数の除法を「包含除」の場面を乗法九九の範囲を超えた数値の問題場面から導入した。その結果、既習の加法、減法・乗法を活用して問題を解決する中で、新しい演算として除法を導入することができた。

(2) 実践事例② 小学校第4学年 「倍とわり算」(8月23日実施) 授業者：長島 寛和

「4 m 200円のひも、10mではいくらか」という課題に対し、それぞれの長さの倍関係をもとに、10mの値段を求めた。帰一法、倍比例等の考え方が式や文章、図や数直線上に表現され、思考の手助けとなった。

(3) 実践事例③ 中学校第2学年 「一次関数の活用」(11月21日実施) 授業者：京極 邦明

フィボナッチ数列のように、与えられた2つの数に次々に数を足していき数列をつくる時、その和の規則性に注目させた。そのことを、文字を使った式で説明するとき、一次関数が出てくるような授業構成にした。

(4) 実践事例④ 中学校第2学年 「一次関数の活用」(11月21日実施) 授業者：石井 勉

水温上昇実験を取り上げて、実験方法を検討してデータを収集した。そのデータを表や式、グラフに表現する活動に焦点化して、一次関数と見なす活動を行った。実験の目的が授業を左右することが明らかになった。

(5) 実践事例⑤ 小学校第1学年 「長さ」(2月13日実施) 授業者：稲垣 悦子

割合の概念の素地指導として、長さの任意単位の学習で、折り紙のびよんびよんがえるを使い、「ある長さを1つのかたまりと見て、その幾つ分」と表すことに気づく授業を行った。数直線につなげることができた。

(6) 実践事例⑥ 小学校第3学年 「倍とわりざん」(2月13日実施) 授業者：高橋 丈夫

「ケヤキ並木の距離(357m)」を身近な物の「倍」で表現する活動を行った。この結果、子ども達は、その子なりの「内的基準」をもっており、「倍」概念の素地にあたる表現を無意識に行っていることが分かった。

(7) 実践事例⑦ 小学校第4学年 「倍とわり算」(2月13日実施) 授業者：長島 寛和

「体長20mの親クジラは、体長8mの子クジラの2.5倍と言えるか」を課題に、整数倍で表せない2量の倍関係を「倍」と言えるか、2.5倍とって良さそうかを、言葉や式、数直線を用いて検討した。

(8) 実践事例⑧ 小学校第6学年 「分数のわり算」(2月13日実施) 授業者：青山 尚司

分数の除法を、小数の除法と関連づけながら指導した。演算決定や計算の説明に数直線図を用いることで、小数の除法と同じ構造で解決していけることに児童自身が気づき、多様な解決方法を引き出すことができた。

3. 大泉地区研究報告

3. 1. 研究主題

「算数・数学的活動に関する研究」

3. 2. 研究の概要

(1) [中学校・国際中等] 学芸大学附属国際中等教育学校の数学科におけるカリキュラム案を紹介。整数、空間図形と平面図形の教材を紹介し、それに対し小学校ではどのような学習をしていけばよいのか、授業の様子などを検討した。

(2) [特別支援学校] 中学部、高等部の数学の学習について、時間数や数学の学習の主な内容を説明。日常生活の中でお金の支払いができるようになるため、概算で支払えるようになるためには、ワークシートを使って段階的に指導を行う。お金を金種別に数えることができるために、個別に関わり指導をする。時

刻・時間の読み方をワークシートで段階を追って指導する。また、2桁以上の加減算が筆算でできるように段階を追って指導するなど、新しく作った特別支援教育中・高等部テキスト「くらしに役立つ数学」は、一般学級でも大いに役立つと好評であった。

- (3) [国際中等] 推定誤差について考えることや母平均を推定する活動に発展させる事もできる「比例・反比例」の導入における公開授業を検討した。実際の授業の中では、小数第一位の存在について生徒が考えられていなかったり、割合の計算の仕方が分からなかったり、2変量の比例関係の見方などについて、今後の課題が挙がった。また、小学校段階や中学校での比例・反比例の取り扱い方について、小・中・高間での情報交換ができた。
- (4) [小学校] 小学校の研究テーマ（国際社会に生きる豊かな学力の育成～コミュニケーション力をはぐくむ教育カリキュラムの開発～）についての説明。その中で、「すっきり求めてみよう～かけざん～」（小学2年生）の実践に対する検討が行われた。指導案の中にコミュニケーションのスキルを明示し、友だちがわかりやすい並べ方をしてみて、他の子がどんな式ができるかを考えるような図の表現でコミュニケーションができるとよいといった課題が残り検討が深まった。

4. 竹早地区研究報告

4. 1. 研究主題

「主体性を育む連携カリキュラムの構想」

4. 2. 研究の概要

1. 育てたい子ども像

- ・数学を身近な問題の解決に利用できる子
- ・新しい数学を作り出そうとする子
- ・数学を使って、人に分かりやすく説明しようとする子

2. 算数・数学のカリキュラムについて

(1) カリキュラムの観点

「数学の内容」	子どもが取り組む数学の内容を示す項目。
「望ましい態度」	子どもが取り組む数学の内容に応じて、教師が重点化して子どもに培いたい態度を示す項目。
「共有する知識や技能」	教師が、子どもたちの学び合いを通して共有させたい知識や技能を示す項目。

(2) カリキュラムのフォーマット

数学の内容〔領域〕	望ましい態度	共通の知識や技能
一次関数〔関数〕	<ul style="list-style-type: none"> ・表、グラフ、式を関連付けて、具体的事象をよりよく解釈しようとする。 ・具体的な事象を、一次関数と捉えようとする。 ・二元一次方程式を関数の式とみようとする。 ・具体的な事象を、一次関数と捉えて、問題を解決し、わかりやすく説明しようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・具体的な事象の中から2つの数量を取り出して、それらの変化や対応を調べられること。 ・2点や、1点と傾きがわかれば一次関数に表すことができること。

(3) 今後の方針

- ① 「望ましい態度」を整理する
- ② 小中9年間で「望ましい態度」につながりを作る

IV. 理 科

附属合同研究会 世田谷地区 報告書

1. 本年度の研究テーマ

「児童・生徒の自然観育成を支える現職教員を対象とした野外学習講座の開発」

2. 研究の概要

研究テーマ「児童・生徒の自然観育成を支える現職教員を対象とした野外学習講座の開発」は、平成20年度附属学校研究会プロジェクト研究として申請認可され、本学の理科教育教室と共同で研究に取り組んだ。児童・生徒の自然体験不足の問題が挙げられるようになって久しいが、この状況において児童・生徒が望ましい形で自然観を形成していく上では、理科の授業に関わる教員が、野外活動についての基礎的な知識・技能を十分に習得している必要がある。よって本プロジェクト研究では、児童・生徒を野外に引率し授業実践できる教員を育てる現職教員研修会の開発を目的とした。小学校・中学校・高等学校の各校において従来行ってきた研修会は継続実施しつつ、野外活動に特化した研修会の在り方を検討した。そして研修会を実施・評価することを通して、各校の特性に合った活動の在り方を検討した。

3. 具体的な実践

今年度は、附属世田谷小学校、附属世田谷中学校、附属高等学校で、計 8 講座の現職教員研修を実施した。従来より行ってきた研修会に加え、今年度は特にフィールドワークに重点を置き、下記の 5 講座の野外学習講座を実施した。

(1) 附属学校合同研究会世田谷部会現職教員研修会・野外学習講座

川崎生田緑地において、地層見学を中心とした現職教員研修会を実施した。また、附属世田谷小学校児童を引率しての地層見学会を行った。

(2) 附属世田谷小学校現職教員研修会

授業研究では、「身の回りの生き物一校内フィールドワーカー」(対象：小学校 3 年)を、北野日出男附属世田谷小学校元校長(本学名誉教授)と理科教員のジョイントによって実施した。また、講義・ワークショップでは「フィールドワーク入門-学校の自然を効果的に使う-」「校内の自然を活用したフィールドワーク授業実践法」と題し、講義と葉脈標本づくりのワークショップを実施した。

(3) 附属世田谷中学校現職教員研修会

校内のフィールドワークを取り入れた「無せきつい動物の分類」の授業実践例について提案し、後半はラミネートフィルムを利用した葉脈標本のカード作りのワークショップを行った。

(4) 附属高等学校地学科現職教員研修会

城ヶ島で地層を観察し地史を考察することを目的に実施している野外実習を公開し、現職研修講座を実施した。

(5) 附属高等学校 理科 SPP 特別公開講座現職教員研修会

附属高校の教育研究所のある妙高高原およびその近郊において、植物、地形、星などについての自然観察を行った。

4. 研究の成果と次年度の取組み

各校内敷地や施設を積極的に活かしたフィールドワークを提案し、参加教員からは「有意義であった」との評価が多かった。また、特別講師を招いたことによる評価も高かった。各機関との繋がり、また、小、中、高、および大学間の連携を今後はさらに強固にするとともに、これからの教員養成に関する様々な社会的要請に応えることができるようにしていきたいと考えている。

(文責：小境久美子)

附属合同研究会 小金井地区 報告書

小金井地区では、以下のような調査を行い、データから子どもたちの実態をとらえることを行った。

小学校では、いろいろな体験の有無と子どもたちの理科についての見方を調査した。

時：2008年12月中旬 方法：クリッカーを用いての調査（ボタンを押してデータを送信するもの）

対象：3～5年 質問：物化生地体験の有無各5問：博物館など施設の利用について5問：自然体験の有無5問：機械や器具の使用の有無5問：理科の教科について19問

物理の体験は、「切れた蛍光灯を交換した」というものは少なかったが、他は80%を超えていた。生物関係では、「花輪を作ったことのある」や「家のペットが子を産んだ」経験が、他項目に比べて少ないことが分かった。「流れ星を見たこと」がある子は約60%であった。博物館の利用体験は90%を超えるものが多かった。

理科の教科については、学年が上がるにつれて、「楽しい」とか「もっと勉強したい」と答えた子どもたちが減っている。「理科は得意ですか」という質問では、「はい」と答えた子は、3年生で約50%、5年生では20%になっている。「理科で学習したことは、すぐわかる」という質問では、「はい」と答えた子は、どの学年も大体40%であった。「理科の学習をすると考える力がつくと思うか」という質問では、「はい」と答えた子は、どの学年でも50～60%であった。「クラスの子より理科を難しいと感じている」に「はい」と答えた子はどの学年も大体20%であった。理科の教科で話し合いの重要性はどの学年でも50%の子が「大事である」と答えている。しかし、「話し合いは、できているか」という問いに関しては、「できている」と答えた子は、20～30%になり学年を経るごとに減っている。また、考察ができていないかどうかを問うたときには「できている」と答えた子はどの学年も約30%にとどまった。「普段の生活に理科が役立っている」と答えた子は、50～60%であった。

このことから、理科の授業では、①約60%の子が「すぐわかる」というわけではないということを念頭において授業を行う必要がある。②子どもたちは、話し合いができていないとはあまり思っていない。学年を経るごとにスキルアップできるとよい。③結果から考察ができるようになるための手だてが必要である、と考えた。

中学校では、昨年度の報告書において、小金井地区の児童・生徒は「人体の学習に対する興味・関心が低い」ことを受けて、今年度は、その理由を明らかにし、人体への興味・関心を高める指導を実践することにした。

2年生の1学級（男子20名、女子20名）に対して、「人体」の学習を行う前に、次のような調査を行った。
[調査1] 人体の学習に対して興味はありますか。また、その理由を説明しなさい。

- ① とてもある ② ややある ③ ややない ④ とてもない

◆結果 ①12.5% ②40.0% ③42.5% ④5.0%

「とてもある」の理由として、「自分のことを知らないのは無責任だから」「自分と皆の成長は違うから」「医者・獣医になりたい」などが挙げられた。一方、「ややない・とてもない」理由として「気持ち悪い」を挙げた生徒が25%いた。この他に「しくみが分かっても見たり感じたりできない」「覚えることが多い」などの回答があった。

この事前調査を踏まえて、次のようなことに留意しながら、「人体」の学習指導を行った。

- * 「人体の学習の目的」の一つとして「自分や家族の体の健康を保つこと」を挙げる。
- * 「身の回りの物品を組み合わせた器官模型」を作製し、頻繁に活用する。
- * 「神経系の実験・考察」の指導にまとまった時間を充てる。

「人体」の学習を終えたときに、調査1の対象生徒たちに次のような事後調査を行った。

[調査2] 人体の学習に対して興味を持つことができましたか。また、その理由を説明しなさい。

- ① とてもある ② ややある ③ ややない ④ とてもない

◆結果 ①35% ②55% ③10% ④0%

授業を通して「ややない」から「ややある」に変化した生徒が多かった。「人体のしくみに興味を持った」「自分の体について知ることは大切であると思った」生徒が増えた。

(小金井中学校 村上 潤)

1. 今年度の研究テーマ

大泉地区では、「小・中・高の連携を図った理科カリキュラムの開発（国際化に対応した理科学習の創造）」を地区の研究テーマに掲げ、東京学芸大学附属国際中等教育学校で実践されている理科カリキュラム、および国際中等教育学校に連携した初等教育における理科カリキュラムの実践的研究を行った。

2. 研究の経緯

本年度は、東京学芸大学附属国際中等教育学校と東京学芸大学附属大泉小学校の両校で公開研究発表会が行われた。それらの機会も利用しながら、お互いに授業実践を通して国際化に対応した理科学習について研究を深めていった。初等教育については、新学習指導要領による理科の新しいとらえ方や新単元、さらに理科学習の中の話し合い活動におけるコミュニケーション力の大切さについて検討した。また、地域の中でどのようなものを教材化しているかという点についても報告した。中等教育の前期については、イマージョンで行う理科の授業と JSL カリキュラムによる理科の授業を実践し、新しいスタイルを取り入れた理科の授業について共通理解することができた。中等教育の後期については MYP 理科の評価観点について、現在までの試みを報告し合った。

《初等教育》

○新学習指導要領による理科学習の変更点と地域の教材化

「実感を伴った理解」の解釈と 3 年生の新単元「風やゴムの力で動くもの」の教材開発について紹介し合った。また、理科学習の中の話し合い活動におけるコミュニケーション力の大切さについても検討した。総合的な学習の時間に相当する菊の子学習の中の大泉フリータイム学習を取り上げて、地域の中でどのようなものを教材化しているかという点についても話し合った。

○公開授業

3 年生「風やゴムの力で動くもの」、5 年生「てこの規則性」の 2 つの単元について授業実践をした。

《中等教育》

○附属国際中等教育学校（ISS）の 3 つの取り組み

- ・国際バカロレア機構が提供する MYP（ミドル・イヤーズ・プログラム）を取り入れたカリキュラム
- ・英語によるイマージョン授業と日本語を母国語としない生徒のための JSL（第二言語としての日本語）
- ・本校独自の学習領域として設定された国際教養

《中等教育・前期》

○公開授業

- ・「プラスチックの不思議（イマージョン授業）」

プラスチックを題材にその化学的性質、実用性、および社会的問題を取り上げていく。科学的な知識だけでなく、意見交換を通して倫理的な側面から資源問題についても考えさせることにつながった。

- ・「生物基礎 HR 授業で行う JSL 指導を意識した顕微鏡観察（JSL 指導）」

タマネギの根の細胞が分裂していく様子を観察する学習活動の中で、日本語を母国語としない生徒のための様々な工夫や配慮がみられた。

《初等教育・後期》

○国際中等教育学校における MYP 理科の評価観点について

PYP との調和を図りながら、5 年間で一貫したカリキュラムを作る。各段階で必要になってくる知識や理解、スキル、態度については、1 年生の段階でしっかりと伝えておく。生徒に 5 年生での目標を意識させ、それに向かって十分に努力できるように、学習活動や評価課題の例示をする。

附属合同研究会 竹早地区 報告書

1. 今年度の研究テーマ

竹早地区幼・小・中連携カリキュラムと新しい学習指導要領の接続について焦点をあて、理科の立場から授業実践を通して「理科の小中連携カリキュラム」の基本的な視点を整理する。

2. 研究の経緯

昨年度、公開研究会において示された竹早地区幼・小・中連携カリキュラムの焦点は、教科・領域、及び子ども理解における異校種間の接続にあった。一昨年度より、連携研究における竹早地区理科部は、小中学校の教科（理科、算数・数学、技術・家庭）がひとまとまりになった「自然グループ」の中で研究を進めてきた。今年度は、主に小学校3～4学年、中学校2～3学年に焦点をあて、かつ教科に重点をあてて研究を進めた。また、2月14日に行われた幼稚園・小学校主催の公開研究会において、連携教育の視点から、中学校理科部も授業提案をした。今年度は、新しい学習指導要領が示され、将来的には、理科の連携カリキュラム構築を目指しているため、新しい学習指導要領と竹早地区連携カリキュラムとの関連を整理し、授業研究会において、その基本的な考え方と実践事例を提案した。また、以前から行っている「点描法を活用した観察活動」について、今年度は中学校の教員が小学校5年生を対象に実施した。中学校においては、1年生の生物单元の中で実施した。

3. 研究の概要

下記の日程で（1）授業研究会、（2）点描法の授業を行った。

（1）授業研究会

日時	対象学年	単元	授業者	助言者	位置づけ
6月27日	小学校6年	燃焼の仕組み	佐川勝史	横浜国立大学教授 森本信也	幼小中連携研究会自然グループ
10月7日	小学校4年	水の変身	佐川勝史		小学校校内活動研究会 中学校理科部
12月2日	中学校3年	太陽系と恒星	小野瀬倫也		幼小中連携研究会
2月14日	小学校4年	骨と筋肉	佐川勝史		幼小中連携研究会自然グループ (公開研究会)
	中学校2年	電気	勝岡幸雄 岩瀬三千雄 小野瀬倫也		

（2）「点描法を活用した観察活動による観察眼の育成」の授業の実施

日時	対象学年	授業者	位置づけ
12月5日	小学校5年	勝岡幸雄・佐川勝史	小学校理科部・中学校理科部
7月～9月	中学校1年	岩瀬三千雄	

4. 成果と課題

授業研究会における学習指導案は教科が提示するが、その後の指導案検討、授業後の研究協議会は、それぞれの部会等に所属する教員が参加して話し合われた。よって教科横断的に検討されたり、異校種間の教員の見解の相違や共通点などが明らかにされ、有意義なものになった。今年度は、新しい学習指導要領の趣旨に基づいて、連携カリキュラムにおける小学校、中学校共通の評価基準（ルーブリック）の柱を作成し、授業実践を通して検討した。授業研究会で提案された5つの単元をもとに事例を拡大し、これまで行ってきた点描法の意義と位置づけを明確にしていくことが今後の課題である。

V. 音 楽 科

平成20年度 附属学校研究会 音楽部会 研究活動報告

1. 今年度の研究テーマについて

今年度の研究テーマは、昨年度に引き続き「学校における音楽科の果たす役割」とした。

昨年度は、このテーマのもとで各学校での取り組みを報告し合い、情報交換をすることが活動の中心となった。どの学校でも学校行事の中に音楽的な内容が含まれている。また、そこにとどまらず児童・生徒の日常生活の中にも音楽が満ちあふれることを願い、それぞれの学校で実践に取り組んでいる。そこで、今年度は新たなメンバーを迎えて、日々の取り組みについて報告するだけでなく、さらに各人が音楽科の役割をどのようにとらえて、実践に取り組んでいるかを情報交換の中からくみ上げ、意見交換することを大切にしたい。

また、新しい学習指導要領が出され、その中でねらおうとしていることについて、これまでの実践と共通することは何か、新たに持つべき視点は何か、それらを日々の授業や行事への取り組みからとらえ直すことを考えてきた。年間計画では全体会、各地区会に加え、本学音楽科の先生を交えた協議会を設けることとした。

2. 今年度の研究活動記録

開催日、開催場所	内 容
4月23日 全体会（竹早中学校）	・今年度のメンバー自己紹介 ・今年度の研究テーマについて →昨年度のテーマを継続することを確認 ・今年度の日程、開催場所の確認 ・大学の先生との協議会について ・教育大学協会全国大会音楽部会（広島大学附属東雲小学校）について
5月28日 全体会（小金井小学校）	・日本人学校における音楽科の果たす役割について 齊藤豊教諭（小金井小学校）によるペナン日本人学校での取り組みに関する帰朝報告
6月25日 合同研究会（学芸大学芸術館）	・各プロジェクト研究の発表 他
9月17日 各地区会 （小金井、竹早、世田谷、大泉）	・1学期の実践に関する情報交換 ・2学期の実践や音楽的行事についての情報交換 ・教育実習の実施状況についての報告、意見交換 ・「コミュニケーション能力を高める」ための音楽授業の模索（大泉） ・「主体性を育む音楽科カリキュラム」について意見交換（竹早）
10月22日 全体会（竹早中学校）	・各校の研究についての報告と公開研究会の告知 ・必修実習、選択実習における実習生指導について情報交換 ・教育大学協会全国大会音楽部会（広島大学附属東雲小学校）の報告、運営に関する役割の調整 ・平成21年度教育大学協会全国大会音楽部会の運営に関する協議

11月19日 全体会（小金井小学校）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 本学音楽科 加藤富美子教授の講演と協議会 → 新学習指導要領の内容から授業実践を考える 音楽活動として意味のある共通事項取り上げる方 言語表現と音楽表現との関係性を考える
1月28日 各地区会 （小金井、竹早、世田谷、大泉）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2学期の実践に関する情報交換 ・ 3学期の実践や音楽的行事についての情報交換 ・ 各校の公開研究会における音楽科教科提案等の作成、確認
2月25日 全体会（竹早中学校）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今年度の活動内容の総括 ・ 次年度の予定と幹事校の確認 ・ 平成21年度教育大学協会全国大会音楽部会の運営に関する協議

3. 今年度のまとめと課題

今年度も、各校でこれまでの実践の積み重ねを生かしつつ、目の前の児童・生徒の実態をとらえた実践が行われてきた。それぞれの学校で状況が重なる部分もあれば、各校の独自性が表れる部分もあり、各自の実践にすぐに結びつくものばかりではないが、各実践から得られた情報は音楽部員にとって大きな共有財産となっている。

今年度の研究で大きなトピックとなったのが、新学習指導要領についてである。8月に行われた教育大学協会全国大会音楽部会では新学習指導要領の作成に携わった西園芳信先生と松本徹先生から、小学校と中学校のそれぞれについて詳しい解説と作成の経緯を伺うことができた。また、本学加藤富美子先生の講演と協議では、新指導要領を意識した実践例を紹介していただき、それらについての各人の実践や考えを出し合いながら、お互いに理解を深めることができた。附属校としては、各校の校風やこれまでの実践を踏まえながらも、先駆的な実践の中で新指導要領の具現化を意識せずにはいられない。そのためには、本実施となるまでの期間で、もう一度日々の取り組みと、新学習指導要領にうたわれた音楽科の内容を照らし合わせ、吟味することが必要になるだろう。

次年度の課題としては、今年度試行を含めて実践したことを基盤として、新学習指導要領を意識しながらも、各校の独自性を生かした取り組みを行い、さらなる情報交換や意見交換の場として附属学校研究会を活用していくことがあげられる。

文責：居城勝彦（竹早中学校）

VI. 図画工作・美術

□平成20年度研究主題

美術教育の可能性をひらく―「双方向性」を視軸とした学びの構造から―

□研究内容

日々の授業実践等をもとに、造形教育における「双方向性」を意識した学び合いのための題材として練り上げていく。

□研究会記録

- | | |
|--------|-----------------------------------|
| 4月23日 | 第1回研究会（竹早中）
19年度プロジェクト報告 |
| 5月28日 | 第2回研究会（小金井小）
20年度の研究計画 |
| 6月25日 | 全体会（大学）
全体会の振り返りと昨年度の課題の確認 |
| 9月17日 | 第3回研究会（特別支援）
外部連携における双方向性の事例研究 |
| 10月22日 | 第4回研究会（世田谷小）
実践経過報告 |
| 11月19日 | 第5回研究会（大泉中）
各地区の実践報告と双方向性の検討 |
| 1月28日 | 第6回研究会（小金井中）
各地区の実践詳細報告 |

□研究の成果と課題

本年度は「双方向」の意味を根本から問い、「双方向」の関係をもつ要因を造形教育から探ることから始まった。このことにより、部員各々が自らの実践の中の「双方向性」を振り返るきっかけとなり、またそれによって育てたい子ども像を再認識し共有し合うことができたのは有意義であった。各部員のもちよった実践事例研究を通し、地区や校種を越えた情報の共有が可能となり、各々が自らの日々の実践や造形教育の可能性を客観的に見つめ問い直す機会ともなった。

一般的に狭義で解釈されがちな「双方向性」というキーワードを、いかに造形教育に落とし込み、実践として帰結していくかは今後も大きな課題である。また子ども、教師、材料、用具、物・事・場といった造形教育特有の要因に加え、大学との連携や教育実習生の受け入れといった附属学校ならではの「双方向性」にまで視野を広げることで、附属校としての特質を生かした実践へと今後一層発展していくことを期待する。

Ⅶ. 体 育・保健体育科

1. 体育・保健体育科部会 研究活動の概要

1. 1 今年度の研究活動

第1回 4月23日 地区会・全体会（大泉地区）	第5回 10月22日 校種別会
第2回 5月28日 校種別会	第6回 11月19日 地区会
第3回 6月25日 全体研究会（芸術館）	第7回 1月28日 全体会（世田谷地区）
第4回 9月17日 地区会	第8回 2月23日 地区会（予定）

1. 2 体育・保健体育科部会全体研究会の概要

1. 2. 1 第1回 4月23日 全体会（大泉地区）

- ・研究推進委員会の報告及び今年度各地区の研究活動予定報告、意見交換

1. 2. 2 第7回 1月28日 全体会（世田谷地区）

- ・今年度各地区の研究活動報告
- ・今年度校種別研究会の活動報告
- ・研究推進委員会の報告
- ・来年度部長、副部長役員選考

2. 世田谷地区

2. 1 研究テーマ「児童・生徒から見た体育科学習内容の検討 ―意識調査を手がかりとして―」

2. 2 主題設定の理由

体育学習にける学習内容の明確化が叫ばれる中、ボール運動領域の戦術学習や器械運動領域の技術学習、また、関わり合い等がその役を担う可能性が議論されてきた。しかし、それらは大人側の視点であり、学習をしている児童・生徒は体育学習で何を学んできていると捉えてきているのかについては、丁寧な検討がなされていない。そこで、本研究では、小学生、中学生、高校生にアンケートによる意識調査を行い、児童・生徒の側から見た学習内容について検討し、体育学習において学習内容を明確にしていく視点を考察することを目的とした。

2. 2 研究経緯

第1回 研究内容、研究方法の検討（4/23）	第2回 質問紙項目の検討①（5/28）
第3回 質問紙項目の検討（9/17）アンケート用紙の作成・実施・集計・分析（10月～12月）	
第4回 分析結果の検討、考察（1/21）	第5回 全体会にて成果の報告（1/28）
第6回 来年度への課題検討（2/25）	

2. 3 研究の内容・方法

- ・小学校から高校まで、同一のアンケートを用いて意識調査を行い、因子分析の結果から、学習内容を抽出した。
- ・学習内容として考えられる項目から、学び取ったと感じられる項目の回答を求めた。
- ・校種（発達段階）や男女間でその内容に差異があるか分析、検討した。

2. 4 今後の課題

分析結果から、児童生徒から見た体育科学習内容は、「楽しさ追究」「技能習得」「関わり合いづくり」「体育知の獲得」の4つの因子があることがわかった。学年別、校種別、性差、また今までの研究成果である4・4・4制の第Ⅱ期とⅢ期の比較（小5～中2と中3～高3）を、分散分析によって検討しているが、詳細な考察は、来年度への課題とする。

3. 小金井地区

3. 1 研究テーマ

- ①『コーディネーション運動を取り入れた教材開発』
- ②『異学年・異校種で取り組むダンスの教材開発』

3. 2 主題設定の理由

昨年、一昨年に引き続き、2つのテーマで研究を実施した。①については昨年度は具体的な運動を例示した。今年度はその点もふまえて、授業での実践を通して検討していきたいと考えた。

3. 3 研究の経過

4月テーマ設定 5月～各校での実践 9月実践報告 11月研究のまとめ 1月研究の成果を報告 2月反省

3. 4 研究の内容・方法

①コーディネーション運動

各校種で実施。「コーディネーションカード集」を授業において用いたり、主運動に関連する種目を取り上げ、実施した。終了後、生徒の反応等もインタビューした。実践を持ち寄り、主運動との関連性や、生徒の感想、授業で扱う際の視点や留意点を検討した。

②ダンスの教材開発

中学2年と小学1年において交流。中学校体育で8回取り組み、うち3回を小学校と交流会という形で行った。中学生は異学年に教えるという視点もふまえてダンスを創作したり、修正を行った。交流会ではダンスを教え合い、それぞれの感想を聞いた。

3. 5 今後の課題

コーディネーション運動については、教員が授業の時期や対象者の特性、主運動との関連などの要素を総合的にふまえて、多くの種目から選択し、提示していけると効果的にこの教材を扱えるのではないかとということがあげられた。ダンスの教材開発については、「リズムダンス」としてのねらいは達成することができたが、カリキュラム内での位置づけが不明確な点が課題としてあげられ、交流する際の学校間でのねらいや内容などの共有化が必要になってくることが明らかになった。

4. 大泉地区

4. 1 研究テーマ 「発達段階に応じた体育の指導」

中・高一貫に伴う小中高の連携を生かしたカリキュラムの開発

4. 2 主題設定の理由

平成19年度より大泉地区に於いて「東京学芸大学附属国際中等教育学校」が開設され、本年度で2年目を迎えた。国際中等学校では、国際バカロレア機構（略称：IBM）の教育理念とその教育プログラムに基づき、中期段階であるミドルイヤーズ・プログラム（略称：MYP）カリキュラム作成とそれに伴う評価について作成が進められてきた。また小学校では国際中等学校への連携を考慮し、高学年の授業において中学校で学習される種目を先取りしての試行などが行われてきた。

4. 3 研究の経過

本年度10月末に実施された MYP 国際講習会に教科として受講し、カリキュラム構築を幅広く展開できるように陣容を整えた。

4. 4 研究内容・方法・今後の課題

①授業見学による生徒の実態観察

中等教育前期、後期をまたぐカリキュラムづくりを検討する際に生徒の運動レベルの現状を把握し指導

手順等の共通認識が必要と考え、保健体育科では平成20年度は中等2年生（国際1期生）の授業を従来の中・高教員全員で担当している。（前期：フットサル、バスケットボール、バレーボール、後期：テニス、ソフトボール、バドミントン、卓球のなかから選択）このことによって従来の中・高という学校種枠の指導からでは知り得なかった、生徒の身体的及び精神的発達段階に起因するであろう活動状況の違いの一部が明らかとなった。中等前期から後期の問題に限らず大泉地区の多くの現状を知ることが要件とされ、相互に普段の授業を見学して生徒の動き方を観察すべきとの認識を新たにした。これにより生徒たちが運動の基礎基本をどのように獲得したかという傾向を見極めようと考えたからである。この結果、大泉地区小・中等（中・高）校に共通する生徒の観察材料として器械運動を取り上げて、授業観察を実施した。特に中等前期から後期に至る、個々の価値観や発達が顕著になり、運動の面でも質とパワーが大きく変化をするこの期間の指導およびカリキュラム作成の指針にもなると考えている。

②MYP カリキュラム作成と評価

2年目を迎えた国際中等学校は国際バカロレア機構（略称：IBM）の教育理念、教育プログラムに基づき、その中期段階としてのミドルイヤーズプログラム（略称：MYP）の8教科群のひとつとして、カリキュラムとそれに伴う評価の作成が進められている。また、MYPプログラムにおいては、相互交流領域という体育単独だけではなく、他の複数教科との連携を図った学習が求められており、改定された学習指導要領に対応しながらその関連構造を構築するという点で苦慮しているのが現状といえる。

5. 竹早地区

5. 1 研究テーマ「幼小中の連携や一貫性を考慮したカリキュラムの研究

～幼小中連携で取り組む心の健康教育～

5. 2 主題設定の理由

竹早地区幼小中連携研究の一環で組織された健康グループとして、テーマを意識した実践を積み重ねていくと同時に、「人間関係を築いていく力を高める」といった視点を幼小中11年間を見通したカリキュラムにおいてももつことで、より心の健康教育の効果を上げられると考えた。

そこで、現行のカリキュラム（保健体育・学校保健）を、自分自身を見つめるのに適した分野「自分」と、友達との関わりを学び、その関わりの中から自身を高めていく分野「友達」の二つに区分し、ステージ・ステップを念頭におきながら、発達段階による違いを考えることにした。

5. 3 研究の経緯

第1回 研究内容、研究方法の検討（4/23）

第2回 幼小中連携研究との関連を検討、11月実践内容検討（9/17）

- ・幼小中研究会「シンクロマット」実践（11/14）
- ・竹早地区の幼小中連携カリキュラム検討（11月～1月）

第3回 「小中合同体育」内容・方法の検討（11/19）

- ・小中合同体育（1月）

第4回 全体会にて成果の報告（1/28）

- ・公開研究会「シュートボール」実践（2/14）

第5回 来年度への課題検討（2/25）

5. 4 研究の内容・方法

(1) 小2「シンクロマット」

竹早地区保健体育科が昭和63年度から行ってきた、小中学校における体育の連携カリキュラムに関する

基礎研究及び異学年合同授業の実践の積み重ねの中から見えてきたテーマである「リーダーシップとフォロアーシップ」に着目し、第1ステージ（幼稚園～小2前期）における、小2のマット遊びにおいて検証を行った。

単元の中で、教え合いや励まし合いを通して、仲間との親密さが増していき、互いに協力して進めていこうとする動きが顕著に現れるようになった。また、動き方を教えたりするなどの技能面やゼッケンや用具の準備をするなどの運営面で、リーダー性を発揮することを楽しむ姿が見られた。そこから、リーダーとしての役割を得ることや仲間をまとめていく経験を積むことに対する価値とともに、2年生段階において意図的なリーダーシップを求めることへの難しさを確認することができた。

(2) 小6、中2「小中合同体育」

これまで積み重ねてきた実践をもとに、今年度はキンボールを新しい種目として行った。また、対象の全児童・生徒が昼食時間を利用して選択種目毎に事前の顔合わせを行い、親睦を深めた。

- ・小中の全体人数比を1対1にし、種目毎の小中の人数比も調整。
→小中2クラスずつで4クラスの合計160人。小は2時間連続で2種目実施（中4時間、小8時間）
- ・バドミントン、卓球、ソフトバレーボール、ユニホック、アルティメット、キンボールの6種目から選択（中は1種目、小は2種目）
- ・種目リーダー会、班長会、グループ反省時間をしっかり取り、児童・生徒の主体的活動を重視して運営する。各種目への連絡指示は種目リーダーを通じて数回行った。

5. 5 今後の課題

- ・竹早地区では、まず授業実践を行い、それを検討した上でカリキュラムに位置づけている。そのため、各学年、ステージにおけるテーマを意識した実践を、今後より多く積み重ねていく必要がある。
- ・カリキュラムの柱を「自分」と「友達」と大きな枠で設定したが、今後実践を重ねながら、その正当性について検討していく必要がある。

6. 体育・保健体育科部会 研究活動のまとめ

今年度も、各地区で理論研究と実践研究が継続して進められてきた。それぞれの研究について情報を交換し、具体的な成果や課題について考察し、教育実践、教育研究の充実を図っていきたいと考える。校種別研究の成果と課題は、紙面の都合上、別の機会にて行うこととする。

文責：世田谷地区 鈴木 聡 小金井地区 尾高 邦生
大泉地区 高橋 直樹 竹早地区 堀口 純平

VIII. 技 術・家庭科

1. 技術分野

1. 1 研究の経過と概要

<第1回> 4月23日(小金井中学校) 技術分野・家庭分野の合同部会および分科会

*異動等の報告、附属学校間の人事交流についての情報交換

*本年度の研究会予定、部会の持ち方と会場校の決定

⇒ 技術分野、家庭分野に分かれて研究を進めることにする。

*技術分野の研究テーマ「教育実地研究生の実習指導力を向上させる方策」

教育実地研究生への指導には、附属学校の努力だけでは改善されない問題が残っている。個々の問題解決にあたっては、附属学校での指導を工夫改善することはもちろんであるが、大学教官と附属学校とのいっそうの連携を進めることが必要である。本年度も、附属合同研究会に「大学・附属教官合同研究会」を組み入れ、教育実地研究生指導に関する具体的な話し合いを持つことにした。

*大学教官を交え、教育実地研究生事前指導の内容と各校の指導分担を決める。

⇒ 専任の技術科教員が不在であった世田谷中学校に、本年度から専任の技術科教員が採用された。

今まで継続してきた事前指導は、これまでの各校の取り組みを生かし、4校で分担する。

<第2回> 5月28日(各地区部会)「教育実地研究生事前指導の準備と指導内容の検討」

<第3回> 6月25日(大学全体会)

<第4回> 9月17日(各地区部会)「教育実地研究生指導内容の検討」⇒ 各校と情報交換

<第5回> 10月22日(各地区部会)「教育実地研究生指導のまとめと評価、指導内容の検討」

<第6回> 11月19日(大泉中学校)「教育実地研究生指導の課題と指導の実際」

*各校での研究生指導全般についての指導内容と指導の実際を報告。

*各校の教育実習生指導に共通する問題点と課題の検討。

*来年度も本年度と同様の形式で教育実地研究生事前指導を行うことの確認。

<第7回> 1月28日(竹早中学校)「新学習指導要領に対応したカリキュラム変更について」

*竹早中学校技術室での工具管理や生徒指導上の工夫などについて実践報告。

⇒ 施設設備が異なる技術(実習)室では、各校それぞれが指導方法や指導上の工夫を行っている。他校との違いを知った上で、教育実地研究生への事前指導や本実習での指導について意見交換をした。

*各校の特色ある実習教材を使った授業についての現状報告と意見交換。

*新学習指導要領に対応したカリキュラム変更について、各校の構想をもとに意見交換。

<第8回> 2月25日(大学 技術ラボ)

※開催予定: 大学・附属教官合同研究会「教育実地研究生指導に関する諸問題について」

*本年度の研究生指導の状況と反省点を大学と附属の双方から報告。

*大学での事前指導内容に関する研究生と附属教師の評価および要望などを出して意見交換。

*事前指導の今後の課題

⇒ 教科教育担当教官以外の専門科目担当教官の参加を要望する。

・研究生の知識・技能の力量アップの方策について継続して検討していく。

・大学教官と合同で継続して討議する必要性が大であることを確認。

*大学と附属中学校側それぞれの立場から、今後の課題と改善案について意見交換。

1. 2 教育実地研究生指導に関する取り組み

- * 久方ぶりに附属中学校 4 校すべてに専任の技術分野教員が配置された。附属学校勤務が初めての教員と初任研修対象の教員が含まれているので、これまで以上に 4 校の情報交換と連携を密にして、事前指導と本実習の指導を行った。各校に担当された研究生の取組状況もよく、評価もおおむねよいものとなった。
- * 研究生の事後アンケートからも教育実地研究生事前指導内容の妥当性が認められたので、本年度の 4 校の指導分担をもとに来年度も同様の形式で行うことを確認した。
- * 相変わらず、教育実習中に参観に来られる大学教官が少ない。来年度も引き続き大学・附属教官合同研究会を行い、率直な意見交換を継続して行うことにしたい。

1. 3 今後の課題

- * 各校ともそれぞれの現状に合わせ、新学習指導要領に対応したカリキュラム変更に取り掛かっている。情報交換からわかった各校に共通する課題の第 1 は、実質の指導時間数不足であり、第 2 に「生物育成」分野の扱い方である。学習指導要領の読み取りと教育現場の現状とを照らし合わせ、今後さらに指導計画の立案と共に内容を検討していくことが必要である。

(小金井中学校 葉山盛雄)

2. 家庭分野

2. 1 研究の経過と概要

- <第 1 回> 4 月 23 日 (水) (小金井中学校)
 - ・今年度の主題設定：小・中・高等学校の家庭科における連携の研究
 - ・各地区の特色の洗い出しと確認 ・共通テーマ：男女共同参画社会を見据えた教育
- <第 2 回> 5 月 28 日 (水) (大泉中学校)
 - ・教育実習生事前指導の内容の確認
 - ・共通テーマ：男女共同参画社会を見据えた教育～家事は誰がするのか
- <第 3 回> 6 月 25 日 (水) (大学全体会)
臨時 8 月 1 日 (金) (「つきじ入船」浦安工場)
 - ・伊達巻き工場の見学 ・食品製造の衛生管理と食の安全性について
- <第 4 回> 9 月 17 日 (水) (地区会)
 - ・各地区に対応した教育実習生の指導 ・教材研究及び指導案作成の実践的指導
- <第 5 回> 10 月 22 日 (水) (特別支援学校)
 - ・各附属学校における教育実地研究生の指導の経過と討議
 - ・特別支援学校の校舎見学
- <第 6 回> 11 月 19 日 (水) (竹早中学校)
 - ・新学習指導要領の内容の確認
 - ・説明会資料の読み合わせ、現行学習指導要領と新指導要領の共通点と変更点
- <第 7 回> 1 月 28 日 (水) (附属高校)
 - ・教育実地研究生の指導方法の見直し ・新しい教育課程への対応の仕方の検討
 - ・小中高における生活指導の連携
- <第 8 回> 2 月 25 日 (水) (竹早中学校)
 - ・家庭科教員にとっての望ましい研修のあり方 ・児童・生徒の興味関心と発達を見据えた指導について

2. 2 本年度の主な動き

(1) 共通テーマ：男女共同参画社会を見据えた教育～家事は誰がするのかについて

現代の家族や家庭生活を考えると、家族の形の変化と共に性別役割分業の変化を挙げることができる。しかし、「男は仕事、女は家庭」が女性の就労の増加などに伴い「男は仕事、女は家事と仕事」となってきた現在、年齢や性差による意識の違いから不平等感を生じ易くなっている。そこで、これからの家族を考えると、家庭の構成員個々の家事能力の向上が求められている。それを基本として、家族の中で個人が自立してお互いに尊重された安らぎのある家庭の創造につながると思う。

現行の学習指導要領には、家庭科の改善の基本方針に「男女共同参画社会の推進、少子高齢化への対応を考慮し、家庭の在り方や家族の人間関係、子育ての意義などの内容を一層充実する」と記されており、授業でも子ども達が自ら男女の相違に気付き、男女共同参画社会に向けた生活のあり方の方向が提案されようになっている。今年発表された新しい学習指導要領の基本方針には「男女共同参画社会」という言葉はなくなっているが、社会に変化に対応し「少子高齢化や家庭の機能が十分に果たされていないといった状況に対応し、家族と家庭に関する教育と子育て理解のための体験や高齢者との交流を重視する」とある。

以上の現状を考慮すると、家庭の機能の充実のためには家族を構成する個々の人たちがどうすべきかと、積極的に考え行動することが急務と思われる。そこで、学校にあっても自己の自立のために家庭生活の機能を充実させる家事についてその能力の主体的な育成を図る、授業を展開することが必要であるとする。家庭科の授業では小・中・高等学校で家族や家庭を扱う場面がある。それぞれの校種の児童、生徒が、家事を分析し実践することで、家事が人として生活する上で必要な行為であると改めて気付く。その気づきが、主体的な行動へとつながっていくものとする。

(2) 現行学習指導要領と新学習指導要領の読み取り

中学校を例に考えてみると、技術・家庭科の週あたり授業時数に関して、現行学習指導要領では、1. 2. 3年で2. 2. 1時間、その他、技術・家庭科に関連する時間としては選択教科の時間が設けられている。昨年3月に告示された学習指導要領では技術・家庭科の週あたり授業時数が1. 2. 3年で2. 2. 1時間と現行と同様の時数だが、選択教科の時間がなくなった。一方、家庭分野の内容に関しては、現行が「A 生活の自立と衣食住」と「B 家族と家庭生活」とに大きく2分類し、必修の内容と選択の内容に分けて指導するのに対して、新学習指導要領では、「A 家族・家庭と子どもの成長」・「B 食生活と自立」・「C 衣生活・住生活と自立」・「D 身近な消費生活と環境」とし、すべてを必修としている。従って、授業時間数としては指導内容は増えているのに時間数は変わらない、若しくは選択教科の時間がなくなった分、減少した趣となっている。内容について具体的に比較してみると、新学習指導要領には、現行の必修内容はほぼ残り、選択内容の一部は削除されたがさらに追加された項目もあり扱う内容は増えているように見える。今後、指導計画の立案と共に内容をさらに検討していくことで具体的に見えてくることもあると思われる。

このような現状を踏まえて、各附属学校の現状を見ると、授業時数は、技術・家庭科として学習指導要領の規定通り1. 2. 3年で2. 2. 1時間で行っている学校と、他教科とのバランスをとり1. 2. 3年で2. 2. 2時間で行っている学校がある。現行の内容でも後者の時間数を実施している学校でさえ指導には工夫を要するところである。まして、新教育課程が実施される折には一層の工夫努力が求められると思われる。

2. 3 今後の課題

- (1) 新しい教育課程に対応した題材の検討及び指導方法の工夫
- (2) 授業時数を確保と、児童・生徒に確かな学力を付ける家庭科、及び技術・家庭科の内容の検討
- (3) (1) (2) を踏まえた小・中・高等学校の家庭科教育の連携

(竹早中学校 阿部睦子)

IX. 英 語 科

平成20年度附研記録

1. 日程は以下のとおり。

- ・4月23日（水）竹早中学、5月28日（水）小金井中学、6月25日（水）全体会 大学芸術館、9月17日（水）地区会、10月22日（水）附属高校、11月19日（水）世田谷中学、1月28日（水）地区会、2月25日（水）国際中等学校。

2. 主な活動内容

① 4月23日（水）竹早中学

- ・人事確認
- ・年度当初の研究計画確認
特別支援学校や小学校での授業研究やカリキュラムの紹介をしてもらう。発表者の確認をする。
- ・授業研究
竹早中・芝田先生のディベートの授業 生徒は59期、12月撮影。自評のあと参加者からの質疑応答。3年生のUnit 5で「携帯が必要か不要か」のテーマがきっかけとなったディベートの授業。

② 5月28日（水）小金井中学

- ・小金井小学校、杉田先生の英語活動の授業
小金井小学校の英語活動の詳細なカリキュラムが提示された。
VTRを通して授業の詳細が理解できた。協議会での主な話題は以下のとおり。Alphabetの提示、文字の読み方指導は何年生からか。TTの打ち合わせ時間の確保について。6年生の授業の様子や反応について。絵本の導入とその活用について。文字指導をどのように導入したらよいか。

③10月22日（水）附属高校

- ・大泉小学校 石毛先生の英語活動の授業
『平成19年度小学校における英語活動等国際理解活動推進事業実施報告書』に基づいて説明。協議会での主な話題は以下のとおり。教材について。小中の接続部分について。英語の音を大切にしたい小学校の英語活動のあり方について。

④11月19日（水）世田谷中学

- ・特別支援学校 小島先生の授業
授業のVTRを視聴。授業では「場の設定」、「小物の準備」を強調。授業内容として単語（パソコン）、チャンツ、メモリーゲーム、レストランの活動を始め、ワークシートを用いた授業実践の報告。授業で大切にされている3つの大切なこととして、「アイコンタクト（視線）」、「ジェスチャー（身振り・手振り）」、「度胸（失敗を恐れない心）」についての説明があった。

⑤2月25日（水）国際中等学校

- ・平成21年度の英語部会の日程確認。
- ・野田哲雄先生の最終講義 平成21年度3月14日16:00～17:00
- ・平成21年度4月22日（水）小金井小学校 杉田先生の授業実践。
- ・平成21年度5月27日（水）大泉小学校 石毛先生の授業実践。
- ・大泉国際中等学校の授業実践報告 「Language B」の資料に基づき、中学1年、中学2年のカリキュラムの説明。

（文責：淡路佳昌）

X. 道 徳

1. 研究の概要

道徳部では、21世紀を生きる子どもたちを育てるため、新しい時代の道徳教育はどうあるべきか、指導内容は妥当であるか等について検討する必要性を感じ、平成14年度から3年間にわたり「子どもの意識に根ざした道徳指導内容の見直しに関する考察」をテーマとして研究を深めてきた。そして平成17・18年度において、道徳指導内容項目の中の一つ「生命尊重」に焦点を絞って、「生命」に対する子どもの意識の実態をあきらかにしようと試みた。子どもの「生命」に関する意識調査及びその結果を受けての検証授業を中心に研究に取り組んできた。また、平成19年度は、学習指導要領の改訂を踏まえつつ、指導内容の見直しも継続させながら指導方法の開発・改善に研究の視点をシフトした。

本年度は学習指導要領の新たな内容、低学年「勤労」中学年「個性伸長」における資料の開発も見据えながら、引き続き、子どもの意識に根ざした道徳指導方法の開発・改善に取り組んだ。例えば、多時間扱いでの授業設計や自己の振り返りの工夫、子どもの考えを深める発問の構成など、多様な道徳授業の構想について検討を深めたいと考えた。各校の特色や子どもの実態を踏まえ、道徳指導方法について、検証授業をもとに研究を進めることとした。

今回の研究でも、通常学級に在籍する子どものみならず、特別支援学校に在籍する子どもに対する授業アプローチを計画した。また、大学における「道徳に関する諸科学の成果を生かした「道徳の指導法」に関する研究」プロジェクト（平成19年度教育改善推進費による「特別開発研究プロジェクト」2年次）と連携し、研究に取り組んだ。

道徳部会研究テーマ「子どもの意識に根ざした道徳指導方法の開発・改善 ～学習指導要領改訂を踏まえて～」

2. 本年度の研究の歩み

時 期	活 動 内 容	会 場
4月	年度研究テーマ・方法についての検討	小金井小学校
5月	授業計画検討	竹早小学校
6月	全体会	大 学
9月	実践研究Ⅰ（小学部1～3年生）	特別支援学校
10月	実践研究Ⅱ（3年生）	大泉小学校
11月	実践研究Ⅲ（4年生）	世田谷小学校
1月	実践研究Ⅳ（2年生）	小金井小学校
2月	本年度研究のまとめ	小金井小学校

（小金井小学校 和井内良樹）

3. 実践研究

(1) 「たんじょうかい」特別支援学校小学部低学年（1～3年生）の実践

1. 主題名「たんじょうかい」

2. ねらい ○自分の誕生日であることが分かり、成長の喜びを感じる事が出来る。

○誕生日の児童をお祝いする気持ちを持つことが出来る。

3. 授業の流れ ①パネルシアターや紙粘土のケーキにろうそくを立て、誕生日のお祝いをする。

②友達や母親からのバースディカードを読む。

③絵本「あなたがとてもかわいい」（作：宮西達也 金の星社）の読み聞かせをする。

4. 指導上の工夫 ○平面上のケーキと立体的なケーキを登場させることで繰り返し学習が出来るようにした。

○事前に母親にカード作成を依頼した。本人が分かりやすい言葉で書いてもらうようにした。

○絵本の読み聞かせから、「あなたがとってもかわいい」とみんなが思っていることを本人に伝わるように3種類（笑った顔、怒った顔、泣いた顔）用意した。

5. 備 考 「いつでも、どんなときもかわいかったそんなあなたがいまはこんなにおおきくなった。（絵本のページより）でもね、まえとちっともかわってないんだよ。あなたがとってもかわいい。」

6. 授業を終えて

誕生会をたくさん経験している3年生Aくんが、授業が始まる前に教室の机を動かしている。「何しているの?」と聞くと「ケーキ」と教員に伝えてきた。友達の誕生会が始まるのが分かって、机を寄せ合ってお祝いしたいという行動だった。今回、誕生日を迎えた2年生のBさんはお母さんにもらったバースデイカードをととても喜んで授業後何度も何度も読んでいた。そして読み聞かせをした絵本を家に持ち帰ってお母さんに読んでもらったそうである。年に1度の誕生日は子どもにとって特別な日であり、自分や周りの友達、家族を振り返ることの出来る機会である。授業を組み立てる際には、繰り返しの内容を加えながら、誕生日を迎える子どもに合わせて活動内容に変化を持たせていくことが課題である。

(特別支援学校 岡田理恵)

(2)「仲間を信じて」4年(資料名「413球の挑戦」)の実践

新指導要領に提示された、「言語活動の充実」「偉人やスポーツ選手など、魅力ある教材の開発」の2点を研究の視点として、授業を構成した。資料は北京オリンピックでのソフトボール優勝の立役者、上野由岐子選手である。オリンピックが終わったばかりで、旬な話題であり、また女性のスポーツ選手であることから、男女とも大きく興味を引いていたようである。また、言語活動として、小グループでの話し合いを、自己のふりかえりに取り入れた。

成果としては、授業の進め方に新しい可能性が見えたことがあげられる。今回は資料を読むのではなく、オリンピックのビデオを見て、上野選手にふれるようにした。子どもたちは、プレイする選手たちに歓声をあげたり、拍手をしたりと、息をのんでソフトボールの決勝戦の世界に入り込んでいるようであった。また、試合のスコアを実際に書いていき、「ここで、上野選手はどんな気持ちだったのだろう。」と問うことで、実感をもって考えることができていた。子どもにとって身近な資料を選択し、提示の仕方を工夫することで、授業に臨む子どもの意識を高められることが感じられた。

課題は、ねらいと資料との差が大きく見られたことである。教師としては、仲間と支えあって努力をする上野選手に注目させたかった。しかし、ビデオが上野選手の気持ちの強さに視点を置いていたこともあり、子どもたちは仲間に対する思いを感じる事がなかなかできなかった。資料の内容を、仲間意識が強く出るものにして、提示すべきであった。

小グループによる話し合いは、あまり子どもの必要感が感じられず、効果的とは言えなかった。資料を通じた話し合いで「仲間に対する意識」があまりなかったので、「仲間と信じあった経験」を問われても考えづらい様子であった。仲間と話し合いたいくなるような、必然性をもたせることが必要だと感じた。

本時の授業を通して、スポーツ教材の有効性や資料作成の難しさについて明らかになった。また、言語活動といっても、安易に話し合いを取り入れたのでは有効性は低い、という点も授業から感じられた。書く活動も取り入れたが、ねらいと資料内容の隔離から、全体を通して子どもの意識がまとまらなかった。資料と授業構成、どんな活動をするのかを、一貫して計画する必要性を、強く感じる実践であった。

(大泉小学校 野村 宏行)

(3)「自らの生命を大切にする」4年(資料名「命のアサガオ」文溪堂)の実践

生命は私たち人間の全ての源であり、人間としてよりよく生きるためにはなくてはならないものである。日常生活の中では自分自身に生命があることやその大切さについて改めて考えることは希だろう。しかし、だからこそ機会をとらえて生命の大切さについて考え、自らの生き方を見つめ直していくことに意義がある。小学校期には、動物や植物などの生き物との触れ合いを通じてその温かさや柔らかさ、不思議さを感じたり、飼育・栽培の体験を通じてその大変さや喜びを味わったりすることが多い。また、中には、弟や妹の誕生や祖父母との別れなどを経験していることもあるだろう。このような生命にかかわる様々な体験を通して自らの生命や他者の生命に

ついて考えることを通して自らの生き方についての考えを深めさせたいと考えた。ところで、生命があるからこそ毎日の学校生活が送れている。38名の仲間が集まり、この場所に集うことだけでも特別なことであり、生命がかかわっている。歌を歌うこと、運動を楽しむこと、難しい問題を考え合うことなど、どれも生命があればこそである。しかし、生命への意識は、それは簡単にことばに表せるものではなく、生き方や態度としてそこはかたなくにじみ出るようなものである。本実践は「いのち」についてのアンケートとして自由記述したものに着目し、子どもたちの意識を探った。本資料は、白血病のためわずか7歳でこの世を去った光祐くんとその母・まみこさんの話である。病気に苦しみながらも精一杯たたかう光祐くんに、まみこさんもまた精一杯の愛情を注ぎ、支えていた。しかし、その甲斐なく光祐くんはこの世を去る。その後、光祐くんが生前大切に育てていたアサガオが季節はずれの花を咲かせ、種が実る。この種を見つめながらまみこさんは、「来年も花を咲かせよう」と決意する。わが子の命を失うという悲しみの中にありながらも、アサガオの花の姿から光祐くんの生命を感じ取り、その生命の分までも生きようとするまみこさんの姿は感動的である。このまみこさんの種への思いを深く考えさせることを通して、生命や生きることについて見つめ直していきたいと考えた。

本時では、光祐くんが大切に育てていたアサガオをまるで光祐くんであるかのように大切に思う母親の気持ちをも深く考えさせた。「この種は光祐のいのちのようなものだ」「光祐のいのちの分まで生きていこう」などの反応が見られた。「いのち」についての学習感想を書く活動では、「たった一つのいのちをこれからも大切にしていきたい」との記述が見られ、自らの生命を大切にしていこうとする前向きな生き方が表現されていた。自らの生命を大切にしていこうとする意欲を高めることができたと考えられた。

(世田谷小学校 関祐一)

(4) 「みんなのために」2年(資料名「おもい出いっばいのなつ休み」東京書籍)の実践

子どもの意識に根ざした道徳授業とは、教師が子どもなりの思いや願いを受止め、子どものものの見方・考え方にそって学習活動をコーディネートしていく授業であると考えた。将来や社会に対する夢と希望、生きがいをもって働くことは、人間として生きていく上でとても大切である。「勤労」は、単に自分のためだけでなく、社会の中で自分の責任を果たすという意味をもつ。自分の仕事に誇りや喜びをもち、働くことの意義を自覚し、進んで役に立とうとする心を育むことが課題となる。子ども一人一人が、自分の働きが周囲の人々の役に立っていることに気づき、みんなのために働くことに対して楽しさや充実感を味わい、意欲的になることが大切である。そのためには、子どもが家庭や地域・クラスなどで行っている日常的な仕事へ意識を向けられるようにし、自分に任されている仕事の意味を周囲とのかかわりの中でとらえるようにすることが大きなポイントであると考えた。

実践では自分が任されている仕事について想起しながら、資料「おもい出いっばいのなつ休み」を読んで、仕事の意味について話し合った。歩道橋掃除をする主人公ゆき子の心情については「辛くてもうやめたい」と思う傍ら、「自分で決めた仕事だからがんばろう」「使う人のためだから最後までやろう」「高橋さんといっしょだからがんばろう」などの反応が見られた。その後、みんなのために役立ったときの体験について振り返り、お互いに「よかったね」「がんばろうね」などとアドバイスし合う活動を行った。子どもたちは意欲的に声をかけあっていた様子だった。しかし、授業全体に、資料が歩道橋掃除という子どもにとって一般的ではない場面だったこともあり、「みんなのために」というよりは、いつも掃除をしている高橋さんのためにという「尊敬感謝」に反応が流れた。「みんなのために」という「勤労」のねらいに迫るためには、まず、クラスでの係当番活動の場面を取り上げることが有効であると考えられた。

(小金井小学校 和井内良樹)

4. 研究成果と課題

子どもの実態把握に基づいてテーマや価値への意識に根ざして、学習活動及び発問構成などの工夫を行った。本年度も特別支援学校における子どもの思いや願いを生かす授業実践によって、自己有用感や自尊感情を高める大切さを改めて認識できたことは大きな成果である。今後とも子どもの意識に根ざした指導内容・方法を新資料の開発とともに各校の指導計画レベルでも進めていきたい。

(小金井小学校 和井内良樹)

XI. 学 校 保 健

1. 研究主題

保健室における心の健康問題への支援

2. 研究経過

本研究は平成9年から継続している。相談活動を分析する事例分析表の研究から、校内連携の阻害要因、早期の円滑な連携の方法について検討する中で「気になる子どものチェックリスト」の作成に至った。今年度は昨年度の「気になる子どものチェックリスト」プレテスト結果を踏まえて改訂したチェックリストを実施し、その結果を分析検討した。その内容を第55回日本学校保健学会で発表した。

2. 1 附属合同研究会開催日時及び会場と内容

第1回 4月23日(水) 15:30～ 会場：小金井幼稚園

- ・研究内容：新旧チェックリストの比較と担任と養護教諭の回答のうち不一致のものについて検討した。
- ・情報交換：養護実習について、麻疹の流行状況について

第2回 5月28日(水) 15:30～ 会場：小金井小学校

- ・研究内容：演題決定とエントリーする分類の確認、発表者の決定を行った。
- ・情報交換：百日咳の流行について、健康診断業者、結核健診について

第3回 6月25日(水) 15:30～ 全体会 会場：芸術館

第4回 9月17日(水) 15:30～ 会場：小金井幼稚園

- ・研究内容：学会発表原稿の確認を行った。
- ・情報交換：アレルギー管理表の使用状況、新型インフルエンザについて

第5回 10月22日(水) 15:30～ 会場：小金井クラブ

- ・研究内容：学会発表用パワーポイントの確認、学会参加者の確認を行った。
- ・情報交換：全附連関東地区会の参加予定と全附連会費納入について

第6回 11月19日(水) 15:30～ 会場：小金井幼稚園

- ・研究内容：学会で受けた質問内容と来年度の研究のまとめ方を検討した。
- ・情報交換：新型インフルエンザ対策について、養護実習について

第7回 1月28日(水) 15:30～ 会場：小金井幼稚園

- ・研究内容：附属学校研究紀要の原稿確認と来年の誌上発表について検討した。また来年度の研究の一部として事例検討会を持つことについて確認をした。
- ・情報交換：新型インフルエンザ対策について、養護実習の誌上や評価方法について、全附連関東地区会について

2. 2 第55回日本学校保健学会発表 平成20年11月16日(日) 愛知県名古屋市 愛知教育大学

演題：「保健室における心の健康問題への支援 -チェックリスト試行と項目間の分析-」

内容：本研究について、2008(平成20)年11月14～16日に愛知教育大学で開催された第55回日本学校保健学会において「保健室における心の健康問題への支援 -チェックリスト試行と項目間の分析-」の演題で一般口頭発表を行った。会場からは、「担任が気になると思う基準について」「回答不一致の状況は？」等の質問があった。座長からは「事例数を増やして統計的なデータをとるとよい」との意見をいただいた。

3. 成果と課題

平成20年1月から平成20年5月にかけて、チェックリストのニーズの高かった中学校および高等学校において、様々な場面で「気になる」とされる生徒を対象として、改訂したチェックリストを実施し、65例を収集した。この65例の中から、教室場面と保健室場面の比較のため教科担任と学級担任がチェックしているもの50例(中学校28例、高校22例)を分析検討の対象とした。チェックリストは、養護教諭とそれ以外の教職員のチェックを並列してつける。6つの大項目(「A 欠席や遅刻、早退」「B 学級内での様子」「C 友人関係」「D 保健室利用」「E 問題行動」「F 本人の様子」と、下位項目としてその詳細を問う60個の小項目を、「よくある」「ある」「ない」「わからない」の4段階で回答した。

50例100回答のうち、「ある」のチェック数平均は中学校で8個、高校で5個であった。小項目の中で、学級担任や教科担任(以下、担任と記す)と養護教諭あわせてもっとも多く「ある」とチェックされたのは、中学校で「C02 仲のよい友達がない」「F01 いつも元気がない・顔色が悪い・表情が暗い・固い」が同数の23個(担任と養護教諭合計回答数)、次いで「B05 周囲が冷ややかな反応を示す」「C03 グループ活動が難しい」であった。また、担任がC02を「ある」とし、養護教諭が「D04 何日か続けて来室する」を「ある」としているものが12例中8例あり、それ以外の保健室利用の小項目も含めると平均して3つの小項目で養護教諭が「ある」としていた。逆に、養護教諭が保健室利用について3つ以上「ある」とした例では、「C 友人関係」について担任が平均して3つ以上「ある」としており、友人関係の項目と保健室利用の項目において相互の関連が見られた。高校で担任が「ある」とした小項目では「A01 理由のはっきりしない欠席や遅刻がある」の16個が最も多く、「F01」の13個を上回った。担任、養護教諭ともに平均3つ以上「ある」とされる大項目はなかった。担任が最も多く「ある」とチェックした大項目は「E 問題行動」であったが小項目の中で散らばりがあり、その中では「E04 先生に友達や親の不満を言う」が9例で最も多かった。養護教諭が最も多く「ある」とした大項目は「D 保健室利用」で、その中の小項目では「D10 頭痛や腹痛を訴える」14例、次いで「D04 何日か続けて来室する」9例であった。その他の小項目では「F01」が14例であった。高校では、チェック数が少ないことから、項目同士の相互の関連は見られなかった。

中学校では「気になる」という早期の状態に、「友人がいない」「保健室を連続して利用する」といった特徴が伺えた。集団の中で人的な繋がりが薄いことから教室場面を離れて保健室を利用すると考えられる。高校では明らかな関連は見られなかったものの、学校生活の中での違和感や不満が主に欠席状態と内科的な主訴に表れており、小項目のチェックの散らばりは、生徒の抱える問題が成長とともに多様化していると考えられる。中学高校ともに、担任と養護教諭の視点の違いを意識し、これらの情報を早期に持ち寄ることによって多面的に生徒を捉えて対応することが可能であると思われる。今後は事例数を増やし、同じ項目で担任と養護教諭の回答が一致しないものについても調査し、分析検討していきたい。

XII. 幼 児 教 育

1. 平成20年度研究テーマ

「3年次教育実習における学生指導の方法と内容の検討～指導案の作成と研究保育を中心に～」

2. 研究の目的

今年度は、実習日数の減少を踏まえて、学生一人ひとりの状況と経験に応じた指導案作成の時期と内容、および実習における研究保育の位置づけと実施方法を検討することを研究の目的とした。幼児教育選修の学生は、ほぼ全員が1、2年次に保育所実習を行うが、そこで得られた保育の知識、技術及びその理解については個人差が大きい。このため3年次実習では、学生の先行経験を踏まえた指導とともに、どのような基本的能力を学生に身につけさせるかが改めて問われている。そこで本研究では、幼稚園教育の特質と教員として必要な能力を理解する機会として指導案の作成を捉え、学生の関心と経験に応じた指導のあり方を試行している。また、研究保育の位置づけを実習の最終的な「仕上げ」から「新たな試行」への契機と捉え直し、実施の時期と振り返りの方法を考察した。

3. 研究の方法

- ・3年次教育実習の基本的な内容を2園舎間で共通にする。
(研究保育の位置づけと、指導案作成の指導の方法改善を含む)
- ・4年間実習プログラムに向けて、2園舎の独自性を活かした学生指導の改善を図る。

4. 研究の経過と内容

第1回 4月23日(水) 大学

- ・今年度の研究内容及び、3年次教育実習の内容確認
5、6月：事前指導(大学)、観察実習2回 オリエンテーション(附属園)
9、10月：3年次教育実習及び評価(附属園)
11、12月：事後指導(大学・附属園)

第2回 5月14日(水) 大学

- ・観察実習内容確認、研究テーマ、目的、方法検討
小金井園舎における学生の受け入れ状況の確認(1年次から4年次)

第3回 6月25日(水) 全体会

6月30日(月) 2園舎合同保育検討会(小金井)

第4回 9月17日(水) 地区会

- ・前期3年次実習経過報告、評価検討

第5回 10月22日(水) 小金井

- ・3年次教育実習報告(評価項目、採点基準)、研究テーマ、内容検討

第6回 12月10日(水) 大学

- ・3年次教育実習内容検討

今年度実習内容としては、実質14日(オリエンテーションを含む)の中で、マップの作成(4～5日)、部分保育(自己PR、絵本、弁当、歌の導入、片付けなど)3回、半日保育(前半：登園から片付けまで、

または、後半：集まり～降園まで）1回、一日保育（遊び、一斉活動、弁当、降園前の集まり）2回（うち研究保育1回）となっている。

小金井園舎では、園行事等により、学生が幼児の遊ぶ姿を十分に観察する時間が少なく、幼児理解や遊び理解が深まらないまま、教員の研究保育の参観、指導案作成を行わざるをえないことがある。予定された実習内容を期間内に一通り行うことが精一杯になりがちで、研究保育の質を高めることが課題となっていた。そこで、研究保育の方法を変えることで、学生がより多くの時間、子どもを観察したり、関わったりする時間をもてるようにした。具体的には、研究保育の学生を1日3名から5名に増やしたところ、1日分の余裕ができ、学生はゆとりをもって幼児理解のための時間をとることができた。研究保育における学生の学びとして、保育を行う学生にとっては、大勢の前で保育をするとともに自分の言葉で保育を振り返る経験になること、参観した学生にとっては、他学生の保育を見ることで自分の保育を振り返るとともに、意見を述べる経験になる。しかし、研究保育以外に自らが幼児と触れ合い、理解していく時間も重要であり、これらをどのように組み合わせ、学びを深化していくかは重要な課題となる。また、一人一人の学生の研究保育に至るまでの学びと研究保育での学びの実態に合わせた事後の指導を行うことが課題としてあげられた。

竹早園舎でも、第2～3週目の日程調整が難しかった事例として、実習生T（4歳児後期）の場合を報告した。行事や実習日程の関係で、担任の保育や指導案を見る前から、自分の研究保育の指導案作成に取りかかる必要があった。その時点で、前半の遊び場面中心の半日保育の指導案しか作成していないため、一日保育の見通しが立てにくく、実習生Tの不安が大きいだろうと思われた。そこで、前半半日保育の日に、その計画・立案・保育を行うことに加え、後半場面（一斉活動：運動会の準備場面）の指導案を作成することを試みた。ここでは、指導のポイントを指導案の書き方にしぼり、担任が指導内容や指導方法について情報を与え、保育も担任の補助としてのみ動くことにとどめた。これにより、通常にくらべ、後半半日保育の指導案作成の負担が増えたわけだが、この経験は、研究保育の指導案作成にあたり、有効な手立てだったと思われる。実習生T自身も、研究保育前に、一日の流れを指導案として書いてみることでよかったですと感想を述べている。その他、担任の指導案、保育を見せる教員研究保育の時期も学生は早い方が、自分も見通しをもてるとの感想があるが、検討の必要がある。

2園舎の実態（実習日数が少ないことから生じる問題）に対して、1年次～3年次1学期の間に保育に入る日を設ける、オリエンテーションの日に部分保育を入れる、前半の半日保育しか経験していない学生には一斉活動の部分保育を入れる、などの案が出された。また実習生の研究保育における学びの意味を考え、研究保育を一日保育の1回目に設定し、その反省や課題を2回目に活かせるようにする方法が出された。

・今年度テーマ、次年度方向性について

昨年度より課題にあげている、4年次実習を含めた、大学4年間を見通した養成のあり方に関する検討は今後も行っていくが、今年度はその中でも3年次実習の内容検討に焦点をあて、見直しを中心とする。

来年度は、教職GP「教員養成メンタリング・システムの開発」の成果を活かしたインターンシップ制の実施（小金井園舎）や、3年次実習における「幼小連携」についての指導内容の検討（竹早園舎）を含んだ、大学4年間の教員養成カリキュラムの検討を行っていく方向性が出された。

第7回 1月14日（水） 小金井

- ・次年度研究の方向性（プロジェクト研究申請）について

1月23日（金） 2園舎合同保育検討会（竹早）

第8回 3月4日（水） 竹早

- ・学生の実践の場における経験内容の整理、学生自らの意味づけに関するアンケート作成
- ・次年度に向けて、課題と成果の確認

5. 研究の成果と課題

5. 1. 本年度の成果

- ・3年次教育実習における研究保育、指導案指導の改善を行った。
- ・4年間を見通した養成についての研究計画を見直し、それぞれの園舎での方向性を出した。

小金井園舎における学生の実践経験を1年次から4年次まで整理した。これをもとに、学生にアンケートを行い、次年度以降の方向性を見出した。竹早園舎における幼小連携は、3年次に、①講話や反省会、打ちあわせ、②研究保育、授業の相互参観、③交流活動の中での保育・授業参加などを行い、限られた日数で、その理解を得られるよう取り組んだ。今年度、②を正式に位置づけ、前期は5年生、後期は3年生と行う。違いなど実感として捉えられ、また素朴な疑問も出やすいので、感想カードで振り返りの新たな視点をもてた。

5. 2. 次年度に向けた課題

- ・4年間の総合的実習プログラムの開発にむけ、現場における学生の学習経験の整理と構造化から着手する。
- ・メンタリング・システムを活かした、インターンシップ制の実施（小金井園舎）。学生が実践の中で保育を理解していくこと、指導する教員が自分の保育を振り返り省察すること、大学教員との連携を図りながら大学カリキュラムにつなげていくこと、つまりは附属園と大学とが連携して学生の学びを支え、保育者養成の充実を図ることを目指す。
- ・3年次教育実習中の幼小連携に関する内容をさらに検討し定着させる（竹早園舎）。
- ・2園舎の独自性を打ち出すと共に、合同で4年間の実習プログラムを開発していく研究方法を検討する。

XIII. 学 習 評 価

1. はじめに

本部会では、作年度「学習評価」のスケールについて「WISC-Ⅲ」「DN-CAS」「LCスケール」の3つ心理検査のレビューを行った。その中でレビューだけでなく、具体的に生徒の指導へ活かす方法として事例に基づく研究を行う必要が提起された。そこで今年度は、3つのスケールの中から「WISC-Ⅲ」について再度部内で学習会を行い、個別ケースにおける事例検討を行った。本紀要では、「WISC-Ⅲ」を用いた「学習評価」とその活用方法としての「事例」について報告する。

2. 研究の成果

2. 1. 主題『評価スケールを活用した指導事例について - 「WISC-Ⅲ」を利用した事例から -』

今年度は、本「学習評価」部会の教員が関係した事例から特別支援学校における小・中学校への相談支援の在り方。

「WISC-Ⅲ」の検査結果を活用した指導事例。

の2点について報告することとした。

※なお、2. 1. 2に関しては、個人情報への配慮から個別事例の内容について一部修正を加えることとする。

2. 1. 1. 特別支援学校における小・中学校への相談支援の在り方

—心理検査を用いたアセスメント支援の可能性について—

i 目 的

特殊教育から特別支援教育への転換の流れの中で、特別支援学校は、新たに地域への相談支援のセンター的役割を担うことになった。本校では、平成15年4月から、本校に相談部を創設して本格的に地域からの相談を受けたり、地域の小・中学校や保育園等に巡回して相談を受けたりするようになった。その結果、とくに、小・中学校の通常の学級に在籍する児童生徒の相談が急増した。本校相談部では、彼らの相談に対して、心理検査を用いたアセスメントによる支援を試みてきた。本稿では、通常の学級に在籍をし、かつ、本相談部における相談の過程で初めて心理検査を行った児童生徒の当時のIQと生活年齢の分布から、両者の関係や傾向を見つけることを目的とした。

ii 方 法

対象は、2003年4月から2008年12月までに、相談部に来室して初めて「WISC-Ⅲ」検査を受けた、当時通常の学級に在籍した児童生徒69名で、当時の年齢とIQとの相関分布(図)において、性別、判断される発達特性などに注目した。

iii 結 果

その結果、分布図から以下の2つの特徴が見られた。

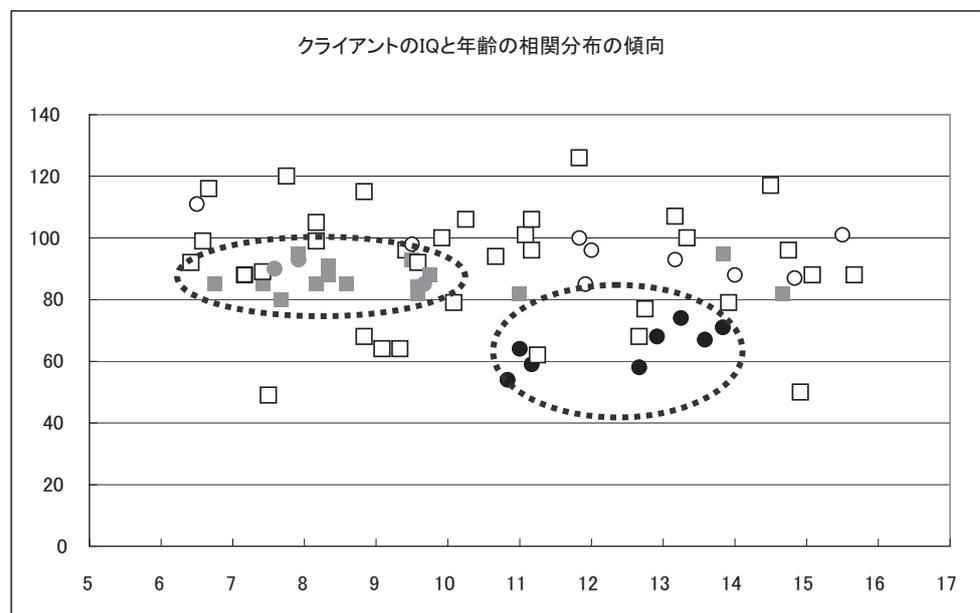
- 1) 文字の読み書きの障害が下位検査の評価点の結果と一致し、学習障害と判断できるケース 16名のうち、13名(81.3%)が小学校1年生から4年生の間の比較的低位年齢に集中した。
- 2) 一方、IQ値が80未満の境界線または軽度知的障害と判断されるケース18名で、男児のケースは小学校低学年から中学生までの間で散見されるのに対して、女児のケースは、8名全てが小学校5年生以上で中学2年生までの比較的高年齢の間に集中した。そのうち、5名(62.5%)は言語性IQが動作性IQよりも有意に高かった。また、その8名のうち4名は、相談の主訴の中に不登校の問題を含んでいた。

iv 考 察

1) の特徴は、特別支援学校の相談における心理検査によるアセスメントでも、比較的早期に学習障害を発見し、早期対応を促すことができる可能性が高いことを期待できる。ただし、小学校5年生以上になると、「WISC-Ⅲ」で明確に判断できる学習障害のあるケースは少なく、学習障害が発見されなかった場合のケースの予後についてはさらに検討が必要であると思われる。

2) の特徴は、軽度知的障害のある女児が、なぜ小学校低学年の間に発見されないのかという疑問を生じさせる。これらのケースの多くは、言語性IQが高かったので印象による判断が難しかったのかもしれないが、学力の遅れなどを細かに観察すれば、もっと早期に対応できた可能性が考えられ、不登校などの二次的な症状を未然に防ぐことができたかもしれないと考える。

以上、特別支援学校のセンター的機能の具体的な支援方法として、心理検査によるアセスメント支援の可能性について検討し、上記のような知見が得られた。今後もアセスメント支援を継続しながらその可能性について検討していきたい。



(2. 1. 1. 文責：附属特別支援学校 安永)

2. 1. 2. 「WISC-Ⅲ」を活用した指導事例

i 対象生徒

中学2年生の自閉症のある女子生徒である。身辺自立はできており、また学習面でも高い能力を持ちながら、情緒の不安定さからくる衝動的な行動がみられ、常に教員がマンツーマンで支援している状況である。作業的な学習や、くりかえし経験し見通しの持てる事には意欲的で集中して取り組める。

ii 「WISC-Ⅲ」の結果と解釈

FIQでは軽度の知的な遅れが示された。VIQとPIQには有意の差はみられなかった。群指数でみると、PS(処理速度) > PO(知覚統合)間に有意の差がみられた。さらに、下位検査でみると、「数唱」「符号」「迷路」「類似」が高い得点であることから、視覚的、聴覚的短期記憶に優れ、視覚的情報を符号化し、見通しが持てるものならば速く正確に処理することができると考えられる。低かった項目は「算数」「理解」でこれは文章を聞いて記憶し、思考したのちに答えを出したり知識を表現する力や過去の経験や既知の事実を正確に評価する力、視覚的な刺激を統合したり非言語での思考や推理、同時処理が弱いと考えられる。言語性検査の下位検

査において高得点の「数唱」「類似」と低かった「算数」「理解」には大きな開きがあり、個人内差の大きさを示すものであった。また、「絵画配列」の得点がやや低く、順序立てて話すこと、順序立てて理解することが弱いと思われる。

iii 「WISC-Ⅲ」を活用した指導事例と生徒の変化の様子

【てだて①】 「時計とよい姿勢の絵カードによる食事指導」

生徒の様子；給食時は、背中を丸め食器に顔を近づけて食べ、スピードが非常に速かった。常日頃、家族や教員に声をかけられていたが改善されなかった。そこで本人の前に時計とよい姿勢の絵カードを置き、～時～分までは食べることを、この絵のようによい姿勢で食べるよう指導したところすぐに改善された。以降、自分で時計と絵カードを置いて食べている。声をかけられることがなくなり、毎回「できたね」と周りに認められるようになった。

考察；視覚的な情報を処理する能力に優れているという強みを活かせたのだと思う。

【てだて②】 「スケジュール表チェックによる見通しのある安心感の持てる学校生活づくり」

生徒の様子；1日の見通しが立ちにくく不安感の強い面があった。苦手な授業等があるとその後も不安定になった。スケジュール表を机に置いて、一つの項目が終わるとチェックマークを入れる事にした。苦手な次の授業まで見通す事ができ、不安定になることが減った。登校後、その日のスケジュールを見るのを楽しみにしている。

考察；1日のスケジュールを表にして見える形にした事で、視覚的に見通しが持て、不安を軽減できたのだと思う。

【てだて③】 「説明文を用いて安心して活動できた交流運動会」

生徒の様子；学校のいろいろな行事が苦手で不安定になり集団行動がとれず、活動に取り組みにくい状況であった。交流運動会の前日に説明した話を文章にして本人と一緒に読み、その紙をスケジュール表とともに当日も本人に持たせた。以前よりかなり落ち着いて参加できた。

考察；文章を聞いて記憶したり過去の経験や既知の事実を正確に評価するといった面の弱さを補うため、情報を視覚的なものに変え、紙にして持たせた事により、いつでも本人が確かめる事ができるようになった。このことで安心して活動に臨む事ができたのだと思う。

交流運動会

あしたは交流運動会です。〇〇学校に行きます。
私はリレーとダンスに出場します。
リレーはたのしみです。知らない人とダンスをするのは少しドキドキします。
給食はありません。お弁当を〇〇学校の人と一緒にホールで食べます。
友達になれたらうれしいです。
帰りは3時15分です。

(2. 1. 2. 文責：附属特別支援学校 松田)

3. 考察並びに課題

以上、今年度は、昨年の反省から事例に基づいた『評価スケールを活用した指導事例について』2つの報告を出した。評価スケールから具体的指導へというデータに基づいた取り組みは行えたと考える。しかし、結果についての検討はなされたが・具体的方策についての検討など未だ部内で取り組めていない課題も多い。他の評価スケールの学習を継続して行うことと併せて次年度への課題としたい。

(文責：附属特別支援学校 吉澤)

XV. 書 写・書 道

1 研究主題

漢字の筆順に関する基礎的研究

—文字を書き進める過程を意識するための手がかり—

2 研究の目的と意義

筆順とは、「実際に文字を書くときに、その文字が形成されるまでの一連の順序」と定義されるであろう。書写および書道にとって、その意味合いは多少変化するが、筆順が大切であると捉えられていることに変わりはない。高校生に、「筆順は大切だと思うか」「文字には定まった筆順があると思うか」という問いを發しても、ほとんどがイエスと返答する。しかし、その実態はとても合理的ではないと思われる筆順で書いている例が多く見られる。さらに、中には筆順がおかしいと認識しながらも、「書ければよいだろう」「読めればよいだろう」という意識からか、直そうとすることがない者もいる。

誰しものが少し試してみれば分かることであるが、同じ文字を異なった筆順で書けば、(1) 字形の整い方に変化が生じる (2) 文字を書く速度に変化が生じる、といったことが起きる。場合によっては、可読性が損なわれていることも少なくない。

こうした現状認識から、漢字の筆順について今までの学習指導はいかに機能していたのか、現在学校教育で扱っている筆順指導の根拠はどこにあるのか、児童・生徒の筆順に関する学力はどう捉えたらよいのか、筆順指導を充実させるためにはどうしたらよいのかなどについて考えていくことはとても重要だと考えた。

なお、この研究は、平成17年度から書写・書道部会で取り組んできた「文字を書き進める過程（書字過程）」と密接に結びついた課題であり、書字過程の意識を高めた学習を推し進めるためにも重要なものとなる。

3 研究の実際

- 4月 研究の方向性の検討
- 5月 先行研究の検討
- 6月 玉篇と市河米庵
- 7月～9月 「筆順指導の手びき」の内容の検討
- 10月～11月 書きやすさ、覚えやすさからの検討
- 12月 字源と筆順の関連の検討
- 1月 楷書の筆順と行書の筆順の検討
- 12月～1月 今年度の研究のまとめ
- 2月～3月 研究の今後についての検討

4 研究の成果と今後

筆順については、大きく分けて三つの要素が検討の対象となるであろうことが明確になった。そして、昭和33年に当時の文部省から発行された「筆順指導の手びき」では、書きやすさ、覚えやすさという機能面の観点から、一部不合理とも捉えられるような筆順が示されていることも理解された。今後は、今年度の基礎研究を踏まえつつ、児童・生徒の実態を探ることによって、これからの筆順の学習指導に生かせる方策を考えていきたい。

(附属高等学校 荒井 一浩)

XV. 教育と福祉

1. 研究テーマ

「特別支援学校における交流のあり方」

2. はじめに

特別支援学校小学部・中学部学習指導要領案（平成20年12月、文部科学省）においては、指導計画の作成に当たって配慮すべき事項に、「学校がその目的を達成するため、地域や学校の実態に応じ、家庭や地域の人々の協力を得るなど家庭や地域社会との連携を深めること。また、学校相互の連携や交流を図ることにも努めること。」が述べられている。そのなかで「特に、児童又は生徒の経験を広めて積極的な態度を養い、社会性や豊かな人間性をはぐくむために、学校の教育活動全体を通じて、小学校の児童又は中学校の生徒などとの交流及び共同学習を計画的、組織的に行うと共に、地域の人々などと活動を共にする機会を積極的に設けること。」としている。特別支援学校幼稚部教育要領案（同上）においても、指導計画の作成にあたっての一般的な留意事項として、「幼児の経験を広めて積極的な態度を養い、社会性や豊かな人間性をはぐくむために、学校生活全体を通じて、幼稚園の幼児などと活動を共にすることを計画的、組織的に行うとともに、地域の人々などと活動を共にする機会を積極的に設けること。」と述べられている。これは20年12月に提出された案だが、社会の動向などを鑑みても大きくその方向性が変わって施行されるとは思えないため引用することにした。また、幼稚園教育要領、学習指導要領においても「社会性や豊かな人間性をはぐくむため、障害のある幼児との交流の機会を積極的に設けるよう配慮」することが示されている。（平成10年12月幼稚園教育要領）そこで、本年度の教育と福祉部会では各学部で行われている「交流」の意義や培われる力について検討し、特別支援学校としてより積極的な交流のあり方を研究することを目標とした。

3. 研究会の概要 平成20年度

- 4月23日 昨年度の報告及び本年度のテーマについて検討
- 5月28日 幼稚部の活動の報告
- 6月25日 全体会（大学芸術館）
- 9月17日 幼・小学部における交流実践報告
- 10月22日 中学部の交流の実践報告
- 11月19日 幼・小・中学部における交流で培う力について
- 1月28日 本年度研究のまとめⅠ
- 2月25日 本年度研究のまとめⅡ 今後の研究課題

4. 研究の概要

1) 幼稚部における交流

本校幼稚部は1978年以降、東久留米市立さいわい保育園と毎週水曜日（年間約23回）に交流を実施している。初めて母親から離れて集団生活を送る幼児や集団生活の経験が乏しい幼児にとっては環境の変化に応じる力を蓄え、経験を積み重ねることが大切なことと考える。交流のねらいとして、保育園園児らと活動を共に行うことによって生活経験を広げ、大勢の友だちとの交わりの中で社会性をはぐくむことを掲げている。本校幼児が保育園に登園して園の計画した活動に参加し、給食を食べ昼寝時間の前（12：15）に降園する。自由遊び、リズム体操、グループ別遊びが主な日課となっている。保育園の運動会に親子で参加したり、近くの公園

に遠足に出かけゲームをしてお弁当を食べたり、餅つきをしたり劇遊びをお互いに発表しあうなど行事を共に
 行うこともしている。また本校幼児が保育園に赴くだけでなく、保育園児らが来校してサツマイモの苗植
 え、芋掘り、マラソンごっこを楽しむなど、季節に合わせた相互的な交流を行っている。本校の幼児たちは、
 当初は園児の多さに圧倒され園児らの遊びを見ている状態だが、交流の回数を重ねることで幼稚部での同じ遊
 び（プール遊び、紙染め遊び、砂遊び、ミニサーキットなど）には自分から参加するようになり、園児の遊び
 を模倣して玩具の取り合いをする場面も見られるようになる。園児は本校幼児の名前を覚え「○○ちゃん、な
 ぜ来ないの」と尋ねてきたり「なぜお話ししないの」「お箸の練習する？」等とらえた特徴に関心を持って質問
 したり、保護者に「今日は学大が来る日」と話をしたり交流を楽しみにしている様子がみられる。また、園と
 幼稚部の保護者にアンケートをとったところ交流を今後も継続してほしいと希望している結果が得られた。本
 校幼児への支援の手立てや関わり方、園児へ介入するタイミングなどを保育士らと話し合い、共通理解を深め
 ていくことが双方の幼児らの成長にとって大切なポイントになると思われる。（文責 高野）



（縁日ごっこ 金魚すくい）



（シャボン玉遊び）

2) 小学部における交流

本校小学部では昭和63年から東久留米市にある私立の「自由学園」との交流をスタートさせた。本年度で
 丁度20年目を迎えた。交流回数や交流内容は時代の流れや児童生徒の実態に応じ変化してきているが、現在
 も続いている。その後、附属学校間の交流の必要性も叫ばれるようになり、附属の小金井小学校との交流が平
 成6年からスタートし、人事交流も行われたりした。

2つの学校との交流は、現在も続いている。両校とも小学校3年生との交流である。交流内容は学校の特性
 に合わせた内容を考え実施してきた。自由学園とは小集団での交流（数人の交流ペアを作り、継続しての交
 流）、小金井小学校とは大集団での交流（小金井公園で遊ぶ、小学校を訪問して遊ぶ）を特色としている。

本校では交流教育は教育課程の中の5つの支援区分の1つである「コミュニケーション支援」に位置づけ「健
 常児との触れ合いを通して、様々な経験をし、社会的な力を養う」ことをねらいとしている。

本校の交流教育は、文部科学省の「学習指導要領」に交流教育の必要性が謳われる数年も前からすでにス
 タートしていたという意義は大きい。先人の先見性に敬意を表したい。本年度の交流は下記の通りである。

＜本年度の交流＞

○自由学園3年生との交流：4回

第1回 5/28（水）「はじめの会」（歓迎のことば、挨拶、歌、グループ発表、踊り、ゲーム）自由遊び

第2回 10/21（火）自由学園訪問（おみせやさん、自由遊び、身体ほぐし遊び、一緒にお弁当）

第3回 11/18（火）小学部の「お店をひらこう」に自由学園の児童が来校（お客さんになり買い物）

第4回 2/13（金）「発表会」（本校の児童が学習発表会の出し物を発表、自由学園の児童が太鼓の発表）

○附属小金井小学校3年生との交流：3回

第1回 6/3（火）小金井小学校を訪問（はじめの会、自由遊び、お弁当、終わりの会）

第2回 10/6（火）都立小金井公園で遊ぶ（ゲーム、自由遊び、お弁当）

第3回 2/2（月）小金井小学校訪問 *小学校がインフルエンザのため休校となり中止

（文責 矢間）

3) 中学部における交流

他校との交流会の様子



- | |
|---|
| ① 交流会で得られる要素 環境の変化 学習内容
友だちや他校の教員とのコミュニケーション 指導者間の交流 |
| ② 実施前と実施後の変化 |
| ③ 次年度に向けて今後の課題 |

- ① 近隣の特別支援学校とマラソン大会を開催している。そこでは、各学校で普段行なわれているマラソンの様子からいくつかのグループを作り、それを照らし合わせて全体のグループ編成をしている。その場面の要素としては、まず普段とは異なる環境になること。少人数のグループから仲間が増えた状態に適応しなければならないこと。さらに大切な事柄は、指導者同士の交流であったりする。そこでは、互いの専門性や生徒を支援する独自の方法を学び取ることができる。
- ② については、生徒それぞれの持っている特徴にもよるものが関係するが、仲間関係が広がることを楽しめたことや、校舎や交通手段等に関心を持った生徒もいた。指導者同士が交流の目的を共有できたのが大きいと思われる。
- ③ 交流校同士が、そのねらいの達成度をよく考えてまとめ、新しい交流のあり方を模索し各学校の教育内容に位置づけ生徒に返していく姿勢が必要であるだろう。

(文責 野原)

5. 考察

日々の実践を振り返り具体的な場面、事例をあげ討論しあうことで、日常生活の指導の現状とその課題が見えてくる。今回は「交流教育」の中で、場面をあげて討論を重ねた。各部一人ひとりに合った交流場面はいかにあるべきか等活発な意見が出され、本校全体での研究課題である「個別教育計画」に関わる内容の発言も多くあった。幼児期では特に、自分から遊びに参加できるようにするために園と話し合いながら活動を決め、行ってきた。本校幼児にとり交流で培われている力は大きい。今後も交流の目標を双方で再確認し共同作業をしていくベース作りを大切にしていきたい。小・中学部の児童・生徒にとっても「交流」の経験で培われている力は大きいし今後も続けたいと、検討会でも話し合われた。また、事前準備として教材教具だけではなく教員間の交流についての共通理解も必要であるとの結論に達した。

今、児童生徒たちに対して、社会の変化に対応し、自分の力で乗り越えたくましく生きていく資質や能力を身につける教育の在り方が求められている。このような社会情勢の中で、障害のある幼児、児童、生徒に対して生活の基礎や基本的な生活習慣をどのように身につけさせていくのが問われ、更には個々のニーズに応じた指導内容、方法の工夫改善を行うことが重要になってきている。

今年度の各部の交流検討会では、得られる学習要素・環境の変化・人とのコミュニケーション・独自の学習内容・指導者の交流などがあげられた。本校の生徒は、幼稚部から高等部までの14年間の学校生活の中で、実社会に出ていくためのコミュニケーション力の向上を教育の基礎としている面がある。複雑に変化している社会環境に上手に適応できる能力やマナー、自分が積極的になれること（自己有用感）といった難しい課題にも、これまでのレポートにあるように対応しなければならない。今後、学校・家庭・地域社会との連携を更に深めた、豊かで発展的な教育場面の展開が必要であると思われる。様々な分野で研究を深めていく努力を続けていきたい。

XVI. 生活科・総合的な学習の時間

1. 1 研究テーマについて

新指導要領が公示された今年度、生活科や総合的な学習の時間を取り巻く状況も大きく変わった。生活科は教科目標及び内容も新たに付け加わり、生活科に寄せられる期待と課題もこれまで以上に大きくなった。また、総合的な学習の時間は、これまで週当たり 3 時間の配当だったものが 2 時間となった。また、これまでは総則の中での扱いであったものが、学習指導要領の解説も出され、ねらいや内容、育てたい力について明示されるようになった。このことを受けて、各校、今後の総合のカリキュラムについて見直しを作業を進めなければならない。

また、総合的な学習の時間を通して、子どもにどのような活動や体験を保証し、どのような資質や能力を育てていきたいのかという問い直しがされている。「活動あって学びなし」という批判はいまだに耳に入ってくる。学習活動や学習過程のパターン化により、学習問題に向かってじっくりと考え、話し合い、教科の学習が生かされたり、自分の生き方を問い直すというような、総合の「総合性」が薄くなり、むしろ弊害も見え隠れしているのが現状である。そのためにも、活動内容の選択や吟味を通して、どのような力を育てたいのかを明らかにする必要がある。

そこで、今年度の研究テーマを「総合的な学習の課題を見据えた授業づくり」し、部員の問題意識を互いに共有しながら授業研究・協議を通して、総合的な学習の時間の本来の趣旨と意義を大切にしながら実践的に取り組むことにした。

1. 2 部会計画

回	実施日	活動内容
①	4月23日(水)	活動計画・研究課題の検討・各校の情報交換
②	5月28日(水)	地区会
③	6月25日(水)	附合研全体会
④	9月17日(水)	地区会
⑤	10月22日(水)	竹早小 森田学級 生活科研究授業(11月5日・文京区研)参加を通して
⑥	11月19日(水)	今年度の研究の経過報告・情報交換と今後の見通し
⑦	2月9日(月)	小金井小 齊藤学級 総合的な学習研究授業
⑧	2月25日(水)	今年度の反省、来年度に向けて

2. 実践報告

2. 1 小金井小学校 山本実践 『あしたにむかってジャンプ』(第2学年)

2. 1. 1 課題のありか

低学年の段階では、様々な経験から学ぶことが多くある。また、こうした経験こそが主体的に考え行動する大きな原動力になると考える。そこで、生活科の学習の中で、自分以外の他者とかがかりあう機会を積極的に設ける。こうしたかかわりあいの中で今まで自分自身がもっていなかった視点や知識を能動的に学ぶことを目指した。

2. 1. 2 授業デザインの視点

○自然とのかかわりを深めさせる

子どもたちは、自然に関して知っている知識や気づいている価値は限定的で偏っていたり、自然に対して刹那的なかかわりをしていることが考えられる。そのため、自然に対する知識や気づきが深まっていないと

見取っている。だからこそ、生活科の学習の中で仲間と共に自然とかかわることが必要であるとする。それぞれの子ども達も持っている自然に対する経験を仲間全員で共有し、経験の差を補い合ったり、個々に独立している気付きを関連づけたりすることが、仲間とのかかわりによって期待できるからである。子どもたちは、経験の差を補い仲間と共に新たな自然体験したりすることで新たな自然に対する親しみを深めていくのである。

○人とのかかわりを深めさせる

2年生は、お兄さん・お姉さんとして1年生に接することに対しても意欲的に取り組んでいる。そこには、今までお世話をしてくれた先輩のように活躍したいという願いをもっている。こうした子ども達の願いは授業の感想や発言からよくわかる。しかし、休み時間などの授業以外の時間では、自然とのかかわりと同様に個人差も大きく、かかわりも瞬間的なものに終わってしまう。また、2年生としてどのように接していけばいいのか自分自身だけではわからないのではないかと考えた。そうした問題点を打破し、小金井小学校の2年生として1年と交流する場を設定している。

2. 1. 3 成果と課題

まず、1年生のお世話をしたいという気持ちを常に高い意欲をもって活動することはできた。これは継続的な1年生とかかわっている活動の中で、1年生に上級生と接することのやりがいを感じることができた成果である。またふりかえりの感想を読んでも、もっと1年生を喜ばせたい。今度はこんなことをしてみたいと感じている。今回のジャガイモパーティーを通して、1年生を楽しませることができたという自信をより一層もたせてあげることができた。

次に、ジャガイモそのものに対する価値を見いだすことができた。最初のジャガイモについての知識は、1年生の頃のジャガイモパーティーの経験だった。そこからジャガイモの生長の様子に驚いたり、実際にジャガイモを食べた時のおいしさを味わったりすることでジャガイモの価値を再発見することができた。こうした気付きは、生活科の学習の中でのジャガイモという対象との出会いやパーティーを開くという目的があったからこそ大きな効果をあげたようである。子どもたちがジャガイモの生長過程を観察する機会をあまり設けることができなかったことが挙げられる。子ども達のジャガイモに対する興味関心は非常に高かった。しかし、児童が今までのジャガイモの生長の様子を知らないため、ジャガイモの収穫時期に関しても自分の実体験をもって予想を立てることができなかったのである。ジャガイモという対象を深く理解するためには、定期的な観察とその生長の段階を把握すること。そして、子ども達はその生長の段階をどのように捉え、どんなことを感じたのか記録をとらせることが必要であった。こうした継続的な観察がジャガイモに対する思いを高めたり、ジャガイモの生長の様子を理解したりする手だてになる。

2. 2 小金井小学校 榊原実践 『だいこんをそだてよう』(第2学年)

2. 2. 1 課題のありか

普段の生活の中で、進んで自分から自然とかかわろうという姿が見られる。進んでかかわりを持つという大きな活動の源には、見たり聞いたりしたことを確認したい思いが込められている。そのような経験から児童はたくさんのことを学んでいく。そこで自分以外の他者とかかわりをもたせることで、今まで自分自身もっていなかった視点を受け入れたり違いを受け入れたりすることを学ぶことをめざした。

2. 2. 2 授業デザインの視点

○自然とのかかわりを深めさせる。

クラスの児童は、自然に関して知っている知識は思い込みで限定されていたり、気づいている価値は偏っていたり自然との対話などの経験が足りないことが考えられる。そのため、自然に対する知識や気づきは、独立

して、関連付けされていないと考えられる。だからこそ、生活科の学習の中で仲間と共に自然とかかわり自分とは違うものを見る視点が必要であると考え。それぞれの児童がもっている自然に対する経験を仲間全員で共有したり、経験や知識の差を補い合ったり、個々に独立している気づきを関連づけることが出来るようになる。児童は、経験の差を補いあい仲間と共に新たな自然体験をすることで自然に対する親しみを深めていく。そして、違う視点を受け入れることにより、新たな気づきが生まれるのである。

2. 2. 3 成果と課題

普段の食事の中に取り入れられているだいこんを、児童はおいしそうに食べている。できただいこんは見たことがあっても、生長過程を知っている児童はいなかった。そこでだいこんの種を蒔き、大きく育てることによって植物の生長過程を体験させる。蒔いてから一週間で発芽し生長していく。その様子を定期的に「見つけたよカード」に観察を記録させた。観察には、大きさや色、太さなど目で見てわかるように定規も持たせた。芽が出て二回目の記録で「こんなにぎゅうぎゅうで大丈夫なのかな」とつぶやきがあり、児童に投げかけ予想させた。そのまま大きくなると予想した児童もいれば、ぎゅうぎゅうだから細くなると予想した児童もいた。中には、別の場所に移したら大きくなるのではないかと予想した児童もいた。物理的なことから、他に移すことは出来なかったため、抜いて数を少なくすることを発言した児童もいたが、一人一人丁寧に蒔いただいこんの種に思い入れがあるのがわかると、発言を撤回した。日が経つにつれ葉の数も大きく多くなるにつれ、児童たちは前回の記録から、だいこんの生長の様子に驚き、形や大きさだけでなく、葉を触り感触を確かめたり、においがするか臭いだり、葉を少しちぎり食べてみたり、それぞれ生長の様子を観察し丁寧に記録していった。葉の大きさに変化が見られなくなると、地中にかくれているだいこんの様子を予想する児童がでてきた。その児童に触発されるように他の児童も地中の様子を予想し、見つけたよカードに記録していった。このように仲間から自分とは別の視点を吸収することで、新たな発見や気づきにつながっていった。一人一人が予想していただいこんの収穫とは違う大きさになってしまったが、なぜ細くなったのか振り返る児童もいた。思い入れのある収穫しただいこんは、細くても家庭に持ち帰り保護者に調理してもらっていた。それぞれ、対話もしながら育て観察記録しただいこんという自然の生長過程を体験することができた。今後の課題として、ぎゅうぎゅうだから別の場所に移してみれば。との考えを物理的な環境でできなかったことである。植物の生長を観察記録していく場合、できるだけ広い場所が必要だと感じた。

2. 3 世田谷小学校 八木実践 総合『〇〇のために行動』（第6学年）

2. 3. 1 課題のありか

自分なりの考えをもち、積極的に活動する子どもが多い。6年生になってからは、じっくり考え、自分の考えに基づいて同じ考えや違う考えの友達を探して、意見交換をして考えを広げたり深めたりすることができるようになってきた。友達と一緒に活動するグループでの学習形態を好む子どもが多い。友達と一緒に考えることで安心感を得て、考えを出し合うことで自信をもって考えをまとめていけるからだと感じているようである。しかし、5年生のときは、安心感を得ることに意識が向きやすく、グループ活動の目的が必ずしも達成すると言える状況ではなかった。活動の目的や期待されている成果を考えてから活動を開始する経験を重ねていくことで、効率よく作業を進めるために分担し合うことの良さや、考えを深めるためにたくさん意見を出し合うことの良さを実感できるようになってきたからはグループ活動が充実してきた。さらに、現在では、交流し合って得た様々な考えを自分なりにつなぎ合わせて考えをまとめることができるようになった子、紙面に様々な手法でまとめることが得意になった子、自分の考えを積極的に発表することができるようになった子など、表現することに力をつけてきた子どもたちである。そこで、以下に示すような姿を目指して本単元を計画した。

○調べたことや考えたことを基にして具体的に行動を起こす子

- 自分と友達の考えを合わせて考えたり、社会の要請にも意識を向けながら判断したり、行動したりする子
- 自分たちの考えに自信をもち、様々な人や社会に発信してその反応を感じ取ろうとする子

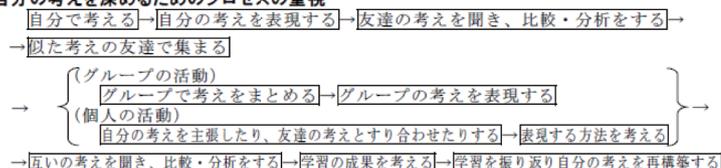
2. 3. 2 授業展開の工夫

単元の目標：社会の様子に目を向けながら、自分の調べたことや考えたことを基に実際に行動を起こし、その成果を様々な人に発信し、これから進んでいく世界に期待をもつ。

展開：＜テーマを決めよう！＞将来の生活で心配なことを話し合う→自分のテーマを決めて情報を集める→ **主張大会**

→主張を聞いて、各テーマのよさを理解し合う→テーマの選び方について話し合う ＜実際に行動！＞実際に取り組んでその成果を確かめる→自分たちの取り組みのよさを主張する方法を考える ＜6-2の38人からの発信！＞

自分の考えを深めるためのプロセスの重視



安心して学習できる学級文化の創造

- ・ともに学び合える仲間づくり
- ・学習方法の定着を図り、自信をもって活用できる環境づくり

▲本単元を構成するにあたっての手立て

2. 3. 3 成果と課題

長期間にわたる活動になるため、子どもが学び続けようとする意欲を持続させる工夫が大変重要になる。自分で考える、友達と考える、再び自分で考えるというプロセスを繰り返して、慣れることにより安心して学習が進み、意見も活発に出し合い、大変意欲的に活動していくことになる。ここで自分の成長に自信をもつと同時に、子どもにとって目の前にある課題を自らより高いものに設定したくなるような仕掛けが必要であることを嘆願を進めながら感じたところである。似ている学習形態を繰り返すのであるから、同程度の課題であると、解決することはできても、達成感を味わうまでには行かない。そこで、振り返り活動を充実させることにして、自分の成長をさらに実感することと、課題として取り組んでいることの進化を実感できるような工夫をすることにより、意欲を持続させてきた。今後は、これらのことを念頭に置いて、単元を構成していくようにしたい。

2. 4 世田谷小学校 沼田実践 『Cool Company ～ハッピーデリバリー～』（第4学年）

2. 4. 1 課題のありか

昨年度から取り組んできたダンス活動を通じて、仲間と協力して課題を解決することや、目標を達成する成功体験を数多く経験してきた。前単元では、病院でダンスを発表し、見てくれるお客さんのことを意識して活動したことで、相手の立場を考えられるようになってきた。しかしながら、相手の気持ちを考える際に、「入院している人はこうに違いない」などという予想をするだけとなり、今まで活動から得た自分たちの経験も生かしきれない面もあった。この点を考慮し、前単元で学んだ『相手のことを考える』ことに加え、自分たちが取り組んできた活動や、自分たちが育ってきたことなどの『今までの経験』をいかして活動ができるように発表先を幼稚園に設定し、以下のような姿を目指して本単元を設定した。

- 自分たちだけではなく、より相手のことを考えて活動する子
- よりよい活動にするために、今までの経験をいかして活動する子

2. 4. 2 授業展開の工夫

子どもたちの意欲を持続させるための手立て

a. 個々の目標設定	b. 相互啓発を促す 『クラス会議』	c. Small Goalの積み重ねで 多くの成功体験	d. 自分の思いを言葉で表現する ふり返り
役割分担で各自の目標を具体的にし、責任感をあたえることで、子どもたち一人ひとりの意欲を高める。	各班が経過報告を発表し情報を共有することで、うまくいった方法を参考にしたり、全員で問題点を検討したりすることで相互啓発を促し、意欲の向上をはかる。	最終目標につながる身近な目標を設定し、子どもたち自ら小さな課題を解決して行くことで成功体験を積み重ね、さらなる意欲、効力感の向上につなげる。	成功体験や活動を言葉で表現（言語化）することで、そこまで積み重ねてきた自分たちの歩みを価値付けすることで、さらなる意欲の向上となり、学び続ける原動力となる。

2. 4. 3 成果と課題

「自分たちのダンスを見てもらって、幸せになってもらう」という目標に向かって本単元はスタートした。子どもたち自身の経験をいかして相手のことを考え、どのようにして幼稚園児を楽しませるかを考え、意欲的に活動に取り組むことができた。交流当日には、ダンスを発表することで喜んでくれる園児や、いっしょに遊んで楽しそうにする園児の姿を見て、子どもたち自身が幸せをもらうことができた。また、反省点を改善して次の発表にいかすこともできていた。しかしながら、自分たちの担当している幼稚園での発表準備に集中しすぎることで、クラス全体的話し合いには積極的になれない姿や、発表場所の広さや相手のスケジュールなど、相手の都合よりも「全員でおどる」という自分たちの都合を優先させる姿も見られた。今後は、これらのことも念頭に置きながら単元を構成していくようにしたい。

XVIII. 情報教育

1. はじめに

昨年おこなったモデルケースよりいくつかの課題ができた。1つ目は生徒のスキルと指導体制である。中学校1年生のスキルにかなりの差があり、高等学校以上に教員に頼るケースが多くTAなしにスキルを学習させることは困難であった。しかしながら、アプリケーションの操作など基本的スキルさえ習得することさえできれば、そこからのスキルアップすることは容易であった。2つ目は本研究の目的でもある他教科のツールとして機能することができたかである。この点に関しては、機能することは可能であった。しかしながら時間数の制限や先の問題点のように基礎的部分の進度が遅くなるため、各教科の要求になかなかこたえることができなかった。今回、外国語科や数学科などと連携ができる部分も多くあったのだが、それぞれの教科の進度についていくことができず断念することがあった。今年度は、このモデルケースを元にまずは中学校における情報教育のカリキュラムと教材の作成を課題をして実践研究を進めた。

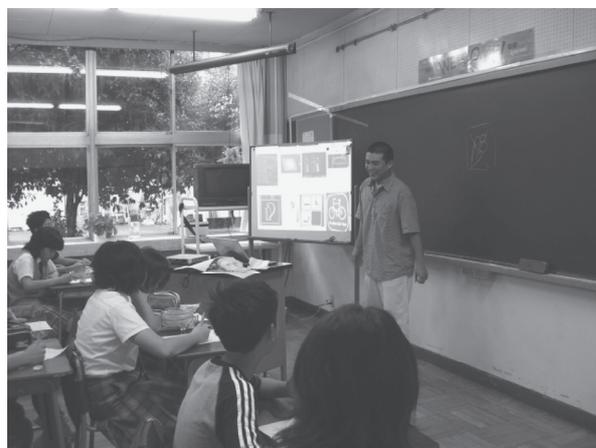
2. 2009年度年間カリキュラムと指導体制

昨年度の反省をふまえ今年は、非常勤講師1人を採用し、TTで授業をおこなった。役割としてはカリキュラムや指導内容は、もちろん専任の情報化の教員が考えを提案し、それを2人で構成しなおして授業を行うスタイルでおこなった。また、中等教育学校1年での「情報」は1単位4クラスで行われているため、各2クラスを分担しておこなった。年間カリキュラムは次のようになっている。

<1学期>	<2学期>	<3学期>
4月： コンピュータ教室の使い方	9月： 著作権	1月： 学校マップの作成
5月： 情報を送受信しよう	10月： Excelの使い方	2月：
6月：	11月： 動画の編集方法	3月：
7月：	12月： 学校マップの作成	

2. 1. 1学期

昨年の課題だった他教科との連携を「ピクトグラム」を題材として試行した。連携した教科は美術科と技術科である。日本国内のみに限らず世界各国のピクトグラムを取り上げ、ピクトグラムの種類や役割、国ごとの特徴や共通点を整理させた後、実際に手書きで生徒にデザインをさせるという流れでおこなった。この際、前半の座学部分は情報科・美術科・技術科の教員が協力して指導案を作成し、情報科・技術科の教員が授業を実践した。そして、後半部の実習は、美術科の教員が指導した。



これまでの考えていた教科連携は、情報科で取り上げたコンピュータスキルや情報収集・整理・発信のスキルが、いかにほかの教科の指導にツールとして利用されるかというものであったが、今回試行した同様の内容をさまざまな教科の側面から同時に教えることの有効性を見出すことができた。

2. 2. 2・3学期

はじめてマルチメディアコンテンツの作成をおこなった。「学校紹介マップを作ろう」を題材として取り上げた。これは中等教育学校校舎（現：大泉中学校校舎）の改築にともない、附属高等学校大泉校舎を使用することとなり、生徒自身が本校舎の構成を知らないことや初めて使用する校舎や教室などにとっても興味を持っていたためである。本課題では、校舎の地図、写真、動画での紹介、高校の先生のインタビューを制作物に必ず含めることを条件とした。また本課題は5人もしくは6人のグループ制作で行わせた。これは今後中等学校後期課程でのシステム開発の授業を考えた、プレミニプロジェクトと位置づけるためである。

3. まとめ

今年度は、昨年度の課題を解決するための試行と再来年からはじまる中等教育学校後期課程での情報Aへのつながりを考えて実践を行った。しかしながら昨年からの課題の一つである各教科でのICTスキルがどのように使われているか。また、どのような学年のどのような時期でどのようなICTスキルが求められているかがまだ把握できていない。これは中学校における情報教育のカリキュラム作成のうえで必要不可欠である。そのためには、本校でのそれぞれの教科のカリキュラムを分析し、ICTスキルを抽出することが必要である。

(文責：河野)

参考文献

- 1) 坂井、英夫他、小中高における情報リテラシーの調査、東京学芸大学附属学校研究紀要、Vol.33、p.193-203、2006

「子どもとともにつくる」学校の創造

— 子どもたちが学び続ける原動力を探る —

附属世田谷小学校

1. 研究主題について

昨年度研究主題を引き継ぎ、本年度は3年次研究の2年目にあたる。本校の伝統と研究成果、これからの教育のあるべき姿を示す大きな理念として、さらに昨年度の研究で残された課題を受け、2年次の副題に「子どもたちが学び続ける原動力を探る」を設定した。

2. 本年度の研究内容与方法

2. 1 研究内容

昨年度子どもたちの学び続ける原動力を「切実感」として研究に取り組んだ。研究を経てこうした原動力の一つが「切実感」であり、さらなる原動力の追究が求められた。本年度はその追究の視点として「自己効力感」を設定し研究を推進することとした。

2. 2 研究方法

教科学習活動、生活実践活動、総合学習活動の3領域ごとに分科会を組織し、先に述べた「自己効力感」を視点として授業研究及び理論研究を推進する。

3. 本年度の研究の概要

	教科学習活動領域分科会	生活実践活動領域分科会	総合学習活動領域分科会
代表者	関 祐一	堀井 孝彦	越後 佳宏
発表会	授業者 大野 桂 6年1組 算数	松本 大介、戸澤 有紀子、 齋藤 祐一 代表委員会会議	八木 美香 6年2組総合学習
	助言者 (所属) 中村 享史 (山梨大学)	小林 宏己 (早稲田大学)	内山 隆 (札幌国際大短期大学部)
校内研	授業者 ・関 祐一 (4年道徳) ・羽仁 克嘉 (2年総合・ 自然とかかわる活動) ・大野 桂 (6年算数)	松本 大介、戸澤 有紀子、 齋藤 祐一 代表委員会会議	・八木 美香、大野 桂、 鈴木 聡 (6年総合) ・沼田 晶弘 (4年総合) ・越後 佳宏 (1年総合)
	助言者 (所属) 松尾 直博 (本学) 松原 静郎 (国立政策研究所) 中村 享史 (山梨大学)	小林 宏己 (早稲田大学)	斎藤 豊 (本学附属小金井小) 野口 徹 (町田市小山田小) 内山 隆 (札幌国際大短期大学部)

4. 本年度の研究成果と課題

4. 1 成果

- ・「子どもたちが学び続けるモデル」
- ・「子どもたちが学び続ける原動力」として明らかになった4点
 - ・問いの共有
 - ・学級風土が支える「安心感」
 - ・子どもが「切実になる」状況
 - ・学びの履歴
- ・学び続ける子どもたちを支える教師の手だて存在と役割の重要性

4. 2 課題

- ・2年間の成果を踏まえた新しい教育課程づくり
- ・「学び続ける子どもの姿」の追究と実践の積み重ねによる教育課程の充実

(文責：内田雄三)

求めあい、つなげあう子

～受容から広がる学びの姿～

附属小金井小学校

1. 研究の概要

本校では、昨年度より、新しい研究テーマを掲げ、研究活動に取り組んでいる。そして、今年度の2月に、これまでの成果をまとめ、研究発表会を開催し、全国から多くの参観者を集め、子どもの姿を通して小金井小学校の新しい授業作りについて発信した。

2. 研究テーマ及び内容

研究全体テーマ『求めあい、つなげあう子』、サブテーマを、「受容から始まる学びの姿」のもと、各教科部では、教科毎の特性や今日的な課題などを考慮し、教科部としてのテーマを設定し、部内授業・提案授業を通し、研究を深めた。「求めあい、つなげあう子」を育てるため、子どもの実態、動き、学習の様子等を、一人一人の詳細なみとり、座席表への活動の記録、ビデオ撮影や学習感想の集約等で、綿密につかむ事を行った。その結果、子どもたちが学習の課題にどのように対峙し、どのような意欲で解決に取り組んでいるかが明確になった。これは、子どもたちの学習の仕方を赤裸々に示しており、授業者が授業をデザインする際のポイントとなった。

3. 研究経過

月	日	研究会・研究授業の内容
4	17	第1回研究会（今年度の研究について・研究計画）
5	15	第2回研究会（各教科部の研究計画提案）
	22	第3回研究会・研究授業①体育部「キックベースボール」2年3組 長澤仁志教諭
6	12	第4回研究会・研究授業②算数部「体積」6年3組 青山尚司教諭
	19	第5回研究会・研究授業③生活・総合部「ジャガイモパーティーをひらこう」 2年2組 山本拓郎教諭
7	3	第6回研究会・研究授業④国語部「じゅんじょですっきり」2年1組 細川太輔教諭
	18	第7回研究会（夏の研究会について・研究発表会に向けて）
8	25	夏の研究会①講演Ⅰ 学習文化研究家 梶浦 真 先生
	26	②講演Ⅱ 青山学院大学教授 鈴木 宏昭 先生
	27	③講演Ⅲ 東京学芸大学教授 中村 光一 先生
9	11	第8回研究会・研究授業⑤道徳部「目標に向かって」3年4組 和井内良樹教諭
	25	第9回研究会・研究授業⑥家庭科部「野菜の特徴を知ろう」6年4組 室木有紀子教諭
10	16	第10回研究会・研究授業⑦図画工作部「造形遊び」4年2組 立川泰史教諭
11	6	第11回研究会・研究授業⑧英語部「色で遊ぼう」3年3組 杉田理恵教諭
12	4	第12回研究会・研究授業⑨理科部「変身する水」4年4組 傳幸朝香教諭
	19	第13回研究会（研究発表会に向けて）
1	22	第14回研究会・研究授業⑩社会科部「さいがいから命を守る」3年4組 牧岡俊夫教諭
	29	第15回研究会・研究授業⑪音楽部「演じて、うたって、つくり上げよう」 ～音楽劇「ごんぎつね」～4年4組 松岡仁教諭
2	13	研究発表会
3	5	第16回研究会（今年度の研究活動の評価及び次年度計画）

国際社会に生きる『豊かな学力』の育成 コミュニケーション力を問う

～言語活動の充実～

附属大泉小学校

1. 研究主題について

21世紀は、国際化の流れが加速度的に進展していく時代である。国や民族の違いを越え、互いに尊重し合い共生していくことがますます求められる。これからの時代には、考え方や文化・習慣の違いがコミュニケーションをとることができるのかが、根幹にかかわる大きな問題である。

本来、人とかかわるコミュニケーション力は、大人になる過程で自然と身についてくると考えられていた。しかし、少子高齢化や高度情報化、家庭教育や地域力の低下等、子どもたちを取り巻く環境の大きな変化によって、学校教育の場で積極的に取り組まなければならない時代へと入っている。

研究3年次の今年度は、国際舞台で活躍できる人間の育成のために、小学校段階でできることは何か、人とかかわる「コミュニケーション力」の育成を中心に研究を進めた。

2. 研究の取り組み

一昨年度は、「コミュニケーション力」「共生の意識」の2つを育成することを柱として、教科学習の改革に着手し、教科カリキュラムの修正を行った。

昨年度は、修正した教科カリキュラム試案について、実践を行って検証していくことを研究の中心とし、教科横断的に育成できる力を「話し合い活動におけるコミュニケーション力」として、検証に取り組んだ。

本年度は、

- ①コミュニケーション力育成の基盤は何か、それを育成するにはどのような教育が必要かを追究する分科会。
- ②コミュニケーションのスキルを確かに習得する学校教育のあり方を探る分科会。
- ③習得したコミュニケーションスキルをどのように活用・実践していくかを追究する分科会。

の3つに分かれて、研究を進め、実践に取り組んできた。

3. 本年度の研究成果と今後の課題

(成果)

- ・「コミュニケーションスキル」と「コミュニケーションしようとする意識・態度」とのかかわりを構造化することができた。
- ・コミュニケーション力育成の基盤を「自己肯定感」「人とかかわることの有用感」「トレランス」の3つにまとめ、その基盤を育てる6つの体験活動をまとめることができた。
- ・話し合い活動におけるコミュニケーションスキルの指導事項を、バージョンアップしてまとめることができた。グループコミュニケーションの分析を行うことができた。
- ・スキルを活用する授業づくりについて、様々な手だてや留意点について研究を進めることができた。

(課題)

- ・コミュニケーション力育成の基盤となる、心の学習の見直しをすること。
- ・話し合いを活性化させるメソッドなど、手だてをさらに明確な形にして、発信・提案できるものにする。
- ・国際をキーワードにした学習の、内容面の開発や、時間数の検討を含めたカリキュラムの研究をさらに進めること。

(文責：関根敦)

平成20年度 研究報告

附属竹早小学校

1. 今年度の研究

竹早地区連携研究として「主体性を育む幼・小・中連携の教育～第2、4ステージに着目して」を研究主題に取り組んだ。11年間の成長に見られる特徴的な過程を大きな4つのステージと小さな8つのステップとして捉えた中の第2ステージは小学校3～4年生、第4ステージは中学校2～3年生あたりにあたる。校種を越えてお互いの実践をひらきながら、連携カリキュラムづくりに重点を置いた。公開研究会では、幼・小・中合わせて13本の公開保育・活動・授業を行い、合わせて連携研究に関するシンポジウムを行った。校内研究会では、幼・小・中連携研究として月1回程度の研究会の他に2本の研究授業を、幼・小研究としては、12本の研究授業を実施した。

2. 連携研究内容

2. 1. 連携教育の組織と活動内容

今年度も、連携研究会を中心に「実践研究部会」と「発達研究部会」の2部体制で研究を進めた。

- (1) 連携委員会：発達研究と実践研究をつなぐ。小・中統一書式の学習指導案の提案を行った。
- (2) 実践研究部会：幼小接続分科会と小中接続分科会（さらに6グループに分化）の2分科会体制で取り組んだ。

- ①各教科・領域における連携カリキュラムと新しい学習指導要領との関連について検討した。
- ②第2ステージ、第4ステージの子どもたちの変容と連携カリキュラムについて、授業提案をもとに検討した。

- (3) 発達研究部会：理論研究分科会、事例研究分科会、調査研究分科会の3分科会体制で取り組んだ。

- ①平成19年度版「主体性が育まれた姿から見る子どもたちの変容のステージとステップ」の見直し。
- ②これまでの教師対象の調査に加え、抽出生徒本人への質問紙調査を試みた。
- ③「対人関係」「自己認識」と「子どもの主体性の発達」との関係を中心に調査・分析を行った。

2. 2. 連携研究研修の日程と内容

7月22日 第1回 講演 「竹早地区連携研究の成果と課題」小林宏己（早稲田大学教授）

11月14日 第2回 授業研究会 「第2ステージの子どもと連携カリキュラム」

授業提案 堀口 純平（小2年） 講師 松田 恵示（東京学芸大学准教授）

山田 剛史（小4年） 講師 中村 享史（山梨大学教授）

12月2日 第3回 授業研究会「第4ステージの子どもと連携カリキュラム」

授業提案 小野瀬 倫也（中3年） 講師 森本 信也（東京学芸大学大学院大学教授）

松津 英恵（中2年） 講師 下村 勇三郎（前日本橋学館大学教授）

3. 幼・小校内研究会

本校の校内研究会は、個人の力量アップを目指す研修の場、個人の研究成果の発表の場として行われる。また、竹早地区の連携教育推進を図るために、研究授業、研究協議会には、中学の教員も参加している。

- | | |
|--------------------------|-----------------------|
| 第1回（4月18日）井口 眞美・西澤 彩木（幼） | 第2回（5月21日）佐川 勝史（理科） |
| 第3回（6月6日）桐山 卓也（図工） | 第4回（6月23日）権 安珠（外国語） |
| 第5回（7月4日）浅見 優子（国語） | 第6回（9月11日）金田 知之（総合） |
| 第7回（9月19日）宮寄 佐智子（国語） | 第8回（9月30日）桐山 卓也（図工） |
| 第9回（10月7日）佐川 勝史（理科） | 第10回（10月23日）佐藤 洋平（体育） |
| 第11回（11月21日）権 安珠（外国語） | 第12回（12月10日）谷本 直美（音楽） |

4. 成果と課題

校種を越えて実践をひらきあい、子どもの姿を通して竹早地区の連携のカリキュラムづくりが軌道に乗いつつある。一方、新学習指導要領を踏まえ、いかに反映させていくかが今後の課題である。

（竹早小：彦坂秀樹）

一人ひとりの主体性、関連性、社会性を高める 中学校教育課程の実践的研究（第2年次）

附属世田谷中学校

1. 平成20年度の研究活動の内容

1. 1 研究主題

- (1) 「一人ひとりの主体性、関連性、社会性を高める中学校教育課程の実践的研究」（第2年次）

今年度の重点テーマ：学び合い、創造する学習集団を育む教育課程の研究

1. 2 研究の目的

- (1) 生徒一人ひとりの主体性、関連性、社会性を高める教育課程研究として、昨年度は「主体的な学び手の自覚を育む3層の学習活動」について研究をすすめた。今年度は、「学び合い、創造する学習集団を育む教育課程の研究」として、主として「関連性」を重点テーマとし、実践的な研究をすすめること。
- (2) 引き続き、教員の「授業力」向上を図り、今日的な教育課題に対する研修及び授業研究会を実施すること。
- (3) 地域や保護者との連携を図る研究体制の確立を目指すこと。

1. 3 研究の内容と経過

- (1) 研究テーマの2年次研究の推進

昨年度の「主体性」の育成に引き続き、今年度は「関連性」を育むための教育活動のあり方についての実践研究をすすめた。特に、各教科・領域での実践、行事等を含めた総合学習での実践などから、お互いを共有・共創するための教育活動について考察しようとした。また、夏季研修会等でも、子どもどうしの関わり、コミュニケーション力についての研修を実施した。

- (2) 各教科テーマによるカリキュラム開発を中心とした研究の推進

平成15年度から文部科学省の研究開発学校として研究がすすめられている英語科の「国際社会で生きていくための基礎的な資質と能力を育むためのカリキュラム開発－英語科における授業集中型カリキュラム（英語科プロジェクト6-3-3）実施による教育内容、指導方法のあり方に関する研究－」の継続に加え、新学習指導要領に伴う各教科ごとのカリキュラム研究を実施した。

- (3) 次年度以降のカリキュラムの作成と検討の推進

新学習指導要領改訂に伴い、本校の教育活動全般の次年度以降のカリキュラムのあり方について、検討をした。

- (4) 授業研究会を中心とした本校教員の授業力向上の推進

年3回の授業研究会（保健体育科、理科、数学科）を実施し、特に「関連性」の視点から研究協議を実施した。

- (5) 教師力、学校力の向上を図るための「生徒指導」「教育経営」等についての研修の推進

- (6) 附属研究会による各教科の小・中・高一貫の研究の推進

大学、学外との研究プロジェクトの連携について、積極的に推進しようとした。

- (7) 現職研修セミナーの開催による教師教育の充実の推進

年2回、それぞれ4、5教科が実施し、現職研修の場を共有した。

- (8) 社会貢献

現職研修・短期研修の場として、各教科に全国から多くの教員が来校し、研修の場とした。

- (9) (1)～(8)による研究成果の公表

『教育研究』『教育と研究』を中心に、本校の教育活動の成果を公開した。

（文責：研究部長 山崎浩二）

2008年度 研究活動報告

附属小金井中学校

1. 本年度の研究活動

2004年度から2007年度の4年間、「学び合いをうながす指導と評価」という研究主題で、研究活動を行った。研究の目的は、学び合いの意義を考察しその必要性を指摘すること、学び合いをうながす指導の方策を考案し一般化を図ること、その方策の妥当性を検討することである。研究成果は、本校研究紀要第44号にて報告した。本年度はこれまでの「学び合いをうながす指導と評価」の研究活動を受け、新学習指導要領に基づいた新しいカリキュラム研究の基礎研究を行うことを目的とした。

2. 本校の研究活動の指針

2. 1 研究活動方針

本年度の研究活動の方針の柱は以下の三点である。

- (1) 生徒の健全な育成に貢献できる教育活動を実現するための実践的研究を行う。
- (2) 附属学校としての役割と使命を意識した研究活動を行なう。
- (3) 学習指導要領を超えるような研究活動を行なう。

学校全体で取り組む研究活動には、共通の土台となる研究の指針が必要である。本年度は、前述の三点を研究活動の方針の柱とした。新しいカリキュラム研究を行うためには、まず目指す生徒像を明確にしていかなければいけない。育てたい生徒像を明らかにする必要がある。第二に、その内容は附属学校としての社会全体から要請されている役割と使命を意識したものでなくてはならない。附属学校の独自性がなくては、大学の附属学校としての存在意義がなくなってしまう。最後に、新しい学習指導要領を意識しながらも、本来あるべきカリキュラムとはどのようなものであるのか、どのような指導が学校教育に求められているのかを明らかにする必要がある。このことは、新学習指導要領に対応するためではなく、将来へ向けての新しい教育課程につながる。

2. 2 研究活動の具体的方法

具体的な研究活動は、学校教育の本質的な課題に迫ることができるよう考慮した。まず、社会の流れを分析し、社会に目を向けた研究活動を行うこと。指導する生徒の実態は、社会の流れや価値観の変化にともなっている。その現状を十分に把握し、私たちの日常的な研究活動として取り組むことが必要となってくる。また、私たちが毎日実践している授業で取り組んでいる個別的な事例から、一般的なものを抽出していくことができるように特に留意した。授業研究の場として、公開授業研究会と校内研究授業を設定した。

公開研究授業研究会は11月に以下のように実施した。また、校内研究授業は定期的（年に4回）実施した。5月数学（松尾吉陽）、6月社会（平田博嗣）、1月美術（大根田友萌）、2月英語（末岡敏明）である。

[11月公開授業研究会の各教科の協議主題]

- ・国語（石井健介）「古典学習の新しい姿を求めて」
- ・数学（石井勉、京極邦明）「関数の眼で課題をとらえることを重視した数学科年間指導計画の作成に向けて」
- ・理科（栗田克弘）「ミクロに見る新しい理科の指導の視点について」
- ・美術（大根田友萌）「自然物のかたちを生かした造形について～「人間形成」にせまる課題研究」
- ・家庭科（佐藤麻子）「幼児とのかかわりを深めるための指導について」
- ・保健体育（直井清貴、谷口善一）「男女共習で行なう柔道の授業（選択制）における課題と今後の展望」
- ・英語（青柳有季）「「学び合い」を促す指導の工夫」

3. 来年度の課題

来年度は本年度の研究成果をふまえて、研究主題を「課題意識を高め、自己への問いを深める教育課程の開発」（仮題）として、より具体的にカリキュラム研究に取り組んでいく予定である。

（文責：栗田克弘）

平成20年度 研究報告

附属国際中等教育学校

附属大泉中学校

1. 研究の概要

東京学芸大学附属国際中等教育学校は開校2年目を迎えた、新しいカリキュラムの検証を繰り返しながら日々の授業実践、研究活動を進めている状況にある。そんな中、6月には「未来を開く中等教育学校の学びのすがた」をテーマに第1回 TGUISS (Tokyo Gakugei University International Secondary School) 公開研究会を開催し、多くの来場者を得て貴重な意見交換が行われた。また、12月には国際バカロレア機構による MYP (Middle Years Programme) スクール認定のための審査担当者の第1回スクール・ビジットがあり、帰国後に貴重な審査結果報告書を受領した。本年度はこれらに対応すべく研究推進に多くの時間を費やした。

2. 研究活動の内容

2. 1. 公開研究会

平成20年6月21日(土)

当日は全体会に引き続き以下の授業公開が行われ、授業後に分科会が開催された。

	公開授業1			公開授業2			
	教科等	内容	授業者	教科等	内容	授業者	
1年	LE (FOUNDATION)	Family	FLEMING Amanda	1年	国際教養 Myselfuture 私たちの未来への提案～よりよいプレゼンテーションを目指して～	古家正暢 藤野智子 雨宮真一 本田千春 馬田大輔	
	LE (ADVANCED)	Pet Peeves	THORNE Calvin				
	社会	プレ・イマージョン「アフリカを感じよう！」	古家正暢 小松万姫				
	化学基礎	プレ・イマージョン「プラスチックの不思議」	鮫島朋美 WOLFE Jason				
	情報・技術・美術	MYP を意識した教科連携「情報伝達の工夫」	河野真也 嶽里永子 馬田大輔				
2年	LE (STANDARD)	Music	WARREN Linda	2年	国際教養	新聞スクラップで、自分の学習テーマを発見する	秋山寿彦
	LE (ADVANCED)	Logic	HAMMOND Troy		国際教養	ボランティアをディベートする	山根正博
	基礎歴史	イスラームからとらえた世界 MYP ガイディングクエストによる授業構成	秋山寿彦		生物基礎	HR 授業で行う JSL 指導を意識した顕微鏡観察	赤羽寿夫
	数学	プレ・イマージョン「数学・遊び・文化」	西村圭一 星野あゆみ		数学	数学・遊び・文化公開授業1の発展	西村圭一

2. 2. 教員研修

MYP ワークショップ参加 (国内、海外)

MYP を中心とした校内研究会

3. 帰国生徒教育研究

附属大泉中学校では3年生を対象に、引き続き帰国生徒教育研究を実施し、附属国際中等教育学校では帰国生徒や外国人生徒に対する日本語指導 (JSL) を含めた実践的研究が推進された。

4. 大学との連携

市民性教育における教材開発・学習指導のあり方及びその学習成果の測定・評価方法に関する研究

5. 成果と課題

本年度は開校1年を経た段階での公開授業で参加者からも多くの示唆に富む指摘をいただくことができ、それらを生かしながら授業実践をしていく必要がある。また、MYP についてはそのスクール・ビジットの報告書を元に発展させる必要があることに加え、まだ国際中等教育学校の授業に直接関わっていない教諭への研修が大切である。

(文責：堀内 順治、上木 多加志)

平成20年度 研究報告

附属竹早中学校

1. 今年度の研究

竹早地区連携研究として「主体性を育む幼・小・中連携の教育～第2、4ステージに着目して～」を主題に研究に取り組んだ。第2ステージは小学校3～4年生、第4ステージは中学校2～3年生が中心である。新しい学習指導要領が告示されたことから、教科の連携カリキュラムに重点を置いた。また、公開研究会は隔年に実施してきており今年度は公開研究会の年では無かったが、研究の内容が幼稚園、小学校との連携カリキュラムづくりであることから、幼稚園、小学校の公開研究会に中学校も5つの公開授業を設定して授業提案を行った。校内研究会は2回実施し、幼稚園、小学校の教員が参加した。そのうち1回は、連携研究会と兼ねて実施した。

2. 連携研究内容

2. 1 連携研究の組織と活動内容

今年度も、連携研究会を中心に2部会体制で研究を進めた。

- (1) 連携委員会：発達研究と実践研究をつないだ。小・中統一書式の学習指導案提案を行った。
- (2) 実践研究部会：幼小接続分科会と小中接続分科会（さらに6グループに分化）の2分科会体制で取り組んだ。
 - ①各教科・領域における連携カリキュラムと新しい学習指導要領との関連について検討した。
 - ②第2ステージ、第4ステージの子どもの変容と連携カリキュラムについて、授業提案をもとに検討した。
- (3) 発達研究部会：理論研究分科会と事例研究分科会、調査研究分科会の3分科会体制で取り組んだ。
 - ①平成19年度版「主体性が育まれた姿から見る子どもたちの変容のステップとステージ」について、主体性の意味を「集団に対する主体性」と捉えて整理した。
 - ②これまで同様、教師対象の調査を継続して行い、加えて抽出生徒本人への質問紙調査を試みた。
 - ③「対人関係」「自己認識」と「子どもの主体性の発達」との関係を中心に調査・分析した。

2. 2 連携研究校内研修の日程と内容

7月22日 第1回 講演 「竹早地区連携研究の成果と課題」講師 小林 宏己（早稲田大学教授）

11月14日 第2回 授業研究会 「第2ステージの子どもと連携カリキュラム」

授業提案 堀口 純平（小学校2年） 講師 松田 恵示（東京学芸大学准教授）

山田 剛史（小学校4年） 講師 中村 亨史（山梨大学教授）

12月2日 第3回 授業研究会「第4ステージの子どもと連携カリキュラム」

授業提案 小野瀬倫也（中学校3年） 講師 森本 信也（横浜国立大学教授）

松津 英恵（中学校2年） 講師 下村勇三郎（前日本橋学館大学教授）

3. 竹早中学校校内研究会

本校の校内研究会は、個人の研究成果の発表の場として授業学年・テーマは授業者の裁量に委ねられている。また、竹早地区の連携教育推進を図るために、研究授業や研究協議会には、幼稚園、小学校の教員も参加している。今年度は公開研究会の発表を控え、小・中連携カリキュラムの作成を視野にいたれた実践報告が行われた。

校内研究会 第1回（7月11日） 第1学年 社会「身近な地域を調べよう」（授業者 鈴木 雄治）

第2回（12月2日） 第2学年 英語「The Story of Silent Night」（授業者 松津 英恵）

第3学年 理科「星を特定せよ！」（授業者 小野瀬倫也）

4. 成果と課題

幼小の公開研究会に中学校が参加するなど、連携研究は具体的な形として進展している。一方で、新しい学習指導要領を踏まえ、教科カリキュラムをいかに反映していくかが今後の課題である。

（文責 小野瀬倫也）

2008（平成20）年度 研究活動報告

附属高等学校

1. 研究紀要第46号

数学	岸谷 正彦	高校数学における教材構成について
理科(生物)	浅羽 宏	高校の<生物>教師に生徒は何を求めているのか？ —<生物>教師を目指す学生諸君に考えて欲しいこと—
理科(生物)	小境 久美子	イオンチャンネルタンパク質の細胞機能に果たす役割
保健体育	佐藤 健太	戦術学習に着目したバレーボール授業
外国語(英語)	高崎 朋彦	多読プログラム Reading Marathon 実践報告 —第2レース—
教育工学委員会	教育工学委員会	Turning Point を活用した双方向授業の実現 —能動的学習者の育成を目指して(1)—
総務部	妙高施設委員会	校外施設の活用に関する研究(3)
芸術(書道)	荒井 一浩	中国紀行記 —中国政府日本教職員招へいプログラムへの参加を通して学んだこと—
国語	中山 至	教材研究「長恨歌」を読むために④ —玄宗兄弟を中心として其四—
国語	鈴木 芳明	高校生に伝えたい吉野秀雄の歌

2. 第50回 全附属高等学校部会教育研究大会における発表

平成20年10月23日から24日

- ・人口問題及び南北問題のノート 古山 良平(地歴公民科)
- ・多読プログラム Reading Marathon -第2レース- 高崎 朋彦(外国語科)
- ・「学校紹介フォーラム」の歩みと学校間交流の課題 鈴木 芳明・藤野 敦(生徒指導部)
- ・学年・学級だよりがもたらす生徒の変容および保護者の理解と協力 林 正太(53期)
- ・「高等学校における発達障害支援モデル事業」に取り組んで 宮城 政昭・塚越 潤(特別支援委員会)

3. 現職教員研修講座の開催

小・中・高における化学(理科)実験授業の課題	平成20年4月～平成21年3月(月1回)
地理の見方・考え方を育てる「地理実習」	平成20年5月30日
夏期特別実験講座 体験講習会(物理)	平成20年7月12日
夏期特別実験講座 体験講習会(化学)	平成20年7月12日
「漢字仮名交じりの書」の鑑賞と表現	平成20年7月14日
「金融」授業の構想	平成20年8月23日
世田谷地区国語現職研修講座	平成20年8月29日
地学科公開研究会 野外観察講座	平成20年10月30日
平成20年度 情報教育研究会	平成20年11月17日
持久走を通しての自己管理能力の育成	平成21年2月2日
国立科学博物館見学、大学・研究所施設見学	平成21年2月4日

4. 東京都立高校教員長期派遣研修の研究

- ・派遣期間 平成20年4月～平成21年3月 ・派遣者名 田村 智恵(国語・東京都立淵江高等学校)

5. 文部科学省発達障害支援モデル校の指定

- <講演>・中学校から高校への支援のあり方 松尾 直博(東京学芸大学准教授・附属竹早地区SC) 平成20年7月8日
- ・個性を理解しよう「LD教授」が語る素晴らしき「発達障がい」 上野 一彦(東京学芸大学教授・日本LD学会会長) 平成20年7月18日
 - ・がんばらない・あきらめない 樋口 一宗(文部科学省初等中等教育局特別支援教育調査官) 平成19年10月18日
 - ・e-ラーニングでの発達障害支援 正高 信男(京都大学霊長類研究所認知学習分野教授) 平成20年3月10日
- <研修>・「傾聴法」 江夏亮(江夏心の健康相談室代表・臨床心理士) 平成20年5月22日、7月10日
- ・「アサーション」 巽岩奈々(カウンセリングルームプリメーラ心理カウンセラー) 平成20年12月10日

2008（平成20）年度研究報告

附属高等学校大泉校舎

1. 目標

- (1) 特別支援委員会と連携を結び、生徒指導実践に直接反映できる視点を追求しながら研究をおこなう。
- (2) 「国際中等教育学校」と連携し、日本語指導や国際バカロレア（MYP、DP）について研究を深める。
- (3) 授業の改善と校内の諸問題の解決に向けて、研究・支援活動を実施し、その成果を積極的に公表する。
- (4) 「自己点検・評価」システムを検討・改善する。

2. 本校における研究活動

(1) 校内研究会

- 第1回（5月19日）特別支援教育について①（提案者：特別支援委員会）
- 第2回（6月16日）特別支援教育について②（提案者：特別支援委員会）
- 第3回（10月20日）海外学校説明会報告〔香港・バンコク・ホーチミン〕（報告者：愛甲修子）
ニュージーランド教育制度視察報告～留学・語学研修の可能性を探る～
（報告者：乾敬子）
- 第4回（11月17日）移行期の検討課題①
- 第5回（2月16日）移行期の検討課題②

(2) 公開授業等

- 第1回（5月17日）：公開授業（公開授業数19：第1～3学年対象）
国語総合、リーディング、上級仏語R、数学Ⅱ、理科総合A、理科総合B、体育
- 第2回（11月25日、28日、30日）：公開授業（公開授業数12：第1～2学年対象）
英語Ⅰ、応用英語、基礎仏語、OCⅠ、数学Ⅰ、数学B
- 第3回（2月18日）：総合的な学習の時間「知的探究科」発表会（第1・2学年対象）

(3) 研究紀要（第33集）の発行（平成20年12月15日）

- 正木 智幸（地学）「高校生を対象にしたプレート・テクトニクス教材の開発」
- 一柳 武・武井 弘一・長谷川 智大・山本 勝治（社会）「社会科見学の成果と課題」
- 笹田 巖（英語）「生徒が動く授業作り：消え行く実践の走り書き備忘録～その1～」
- 長瀬 瑞己（国語）「地名・姓の分布を読む」

3. 第50回全附属高等学校部会教育研究大会に参加

外国語・地歴公民・生活指導・あり方の各部会に参加

生涯発達支援学校としての授業実践

東京学芸大学附属特別支援学校

1. はじめに

今日の特別支援教育は、障害のある子どもたちの自立や社会参加に向けた主体的な取り組みを支援する視点を大切にし、一人一人の生涯にわたる支援の継続を重視している。この特別支援教育を推進していくにあたり、「個別の教育支援計画」の策定、実施、評価が求められ、幼児期から卒業後の一貫性のある支援を行うよう言及されている。また、「特別な教育的ニーズに応じた支援」や「個に応じた教育」のより一層の充実等、学校教育における授業実践の充実についても重視されてきている。授業実践を充実するには、「Plan - Do - See - Plan」の過程が多くで学校で活用されていると思われる。しかし、日々の授業実践の充実を注目するだけでは、幼児期から高等部又は卒業後までを見通した一貫性のある支援に至るのは難しいと思われる。

そこで研究目的は、指導計画の立案に注目し、各学部の各教科や領域等の指導目標や指導内容、使用教材、指導時数の配当等から相互補完的な授業実践へのアプローチをめざし、多角的に授業実践の充実を試みようと考えた。

2. 研究目的

幼児児童生徒の一人一人の生涯発達支援をめざした一貫性のある授業実践の充実を図ることを目的とした。その際、個別の教育的ニーズ支援システム（SIEN）を用いて、授業-指導計画-個別教育計画及び教育課程の相互の評価を通じて、生涯発達支援学校としての授業モデルの開発と指導計画の見直しを3年計画で行うこととした。今年度は3年計画の1年次であった。

3. 研究方法

今年度は、各学部が全体の研究主題に沿い、各学部でテーマを設定し、授業研究などの実践を通して目的を検討していくこととした。

3. 1 幼稚部

コミュニケーションに焦点を絞り、研究を進めてきた。幼稚部では、個別の学習の時間が設定されており、その個別指導のプログラムと集団指導における相互の指導において幼児期のコミュニケーション支援を検討した。個別指導は、大学の協力の下、発達検査によるアセスメントを実施し、目標設定、課題設定等を行い、支援プログラムを作成し取り組んできた。集団指導は、「朝の集まり」を指導計画から見直し、設定遊びを設けて、個別指導の汎化場面へと繋げた。

3. 2 小学部

コミュニケーション支援に焦点を絞り、一人一人のニーズに応じて、相互補完的な授業計画を行い、自閉症のある児童と低学年学級・高学年学級との双方向的な授業実践に取り組んだ。低学年児童においては、「活動支援」に重点をおいた授業作り、高学年児童においては「関係支援」に重点をおいた授業作りを行ってきた。

3. 3 中学部

中学部と高等部に設定されている生活支援「くらし」の授業を取りあげ、各授業の「教材・教具」に焦点を絞り研究を進めた。各授業では、一人一人のニーズに応じた「教材・教具」の開発を進めた。生徒の実態把握に基づいて、「教材・教具」の考案、授業の展開、「教材・教具」の評価によって、改良を行ってきた。「教材・教具」を改良には、大学と連携し、生徒が実際に楽しんで学習できるような内容へと改良を進めた。

3. 4 高等部

高等部は、現在の生徒のニーズを把握した上で、教科「くらし」の各分野の授業実践を通じ、成人期以降を見越した教科「くらし」の授業実践の在り方や、「調理・被服・住まい・生活知識」の各分野の指導内容を検討してきた。

(文責：増澤貴宏)

心が動く 体が動く

～表現する喜びを味わう～

東京学芸大学附属幼稚園（小金井園舎）

1. 研究主題について

幼稚園では日々、幼児がいろいろな姿で、心の内を表している。ウサギになりきって鬼ごっこをしたり、忍者になったつもりで縄で遊んだり、稲の豊穰を祈って舞を舞ったりするなど、生活や遊びを通して多様な表現を楽しんでいる。一方で、思っていることがあっても言えなかったり、友達とうまくかかわれなかったりする幼児もいる。教師は、どうすれば素直に気持ちを表わせるのかという悩みを抱えながら幼児と関わっている。これらの経緯から、幼児一人一人が本来の自分を表現しながら遊んだり生活したりしてほしいという願いのもと、表現する喜びを味わえるような保育の在り方を探っていきたいと考え、今年度の研究主題として取り上げることにした。

2. 研究の目的と方法

1) 研究の目的

- 表現する喜びを味わう保育の在り方を明らかにする
- 幼児が表現する姿を通して育ちをとらえ、教育課程を見直す

2) 研究の方法

- 事例検討を通して
 - ・表現を支える要素を構造化する
 - ・表現の過程をとらえ、幼児の育ちと保育について考察する
- 保育検討を通して
 - ・適切な幼児理解に基づく教師の具体的援助の在り方を探る
 - ・表現を引き出す適切な環境（教材・素材など）の構成を考案する

3. 研究の内容と成果

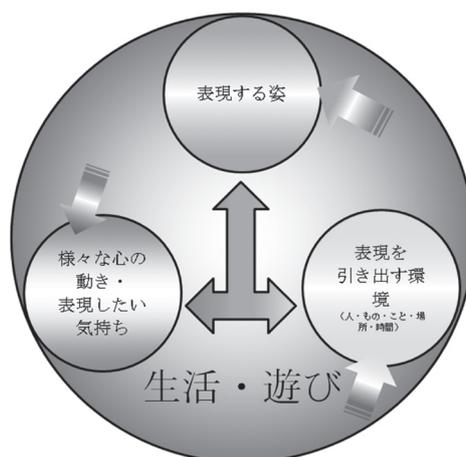
事例検討を重ねる中で、幼児の表現する姿を支える要素を構造化してきた。その要素として、以下の3点が挙げられた。

- 1) 背景となる生活・遊び
- 2) 様々な心の動き・表現したい気持ち
- 3) 表現を引き出す環境（人・もの・こと・場所・時間）

これらが様々に絡み合うことで幼児は表現する喜びを味わっているのではないかと考えられる。また、それを構造化した図を作成し、事例検討を考察する上での視点とした。（図1）

さらに、その視点をもとに日々の保育の事例を検討し、表現する喜びを味わう保育についてこの保育資料を作成した。

平成20年11月1日には研究協議会を開催し、全国からの参観者に保育を公開し、研究発表、保育検討会、鼎談等を行った。



(図1) 表現の構造図

4. 今後の課題

- ・これまでの研究成果をもとに、教育課程を編成していく。
- ・日々の保育の検討を続け、教職員全員で保育を見つめ直し、幼児の育ちを支えていく。

(文責：中野 圭祐)

主体性を育む幼・小・中連携の教育

附属幼稚園（竹早園舎）

1. 本年度の研究

過去6年間、竹早地区幼・小・中の教員で連携研究を行ってきた。（「主体性を育む幼・小・中連携の教育」の研究の概要については、竹早小学校・竹早中学校のページを参照）

1. 1. 幼稚園の取り組み

昨年度に続き、幼稚園4、5歳児担任は、1年生担任と共に幼・小接続分科会に所属し、「子どもの見とりと手だて」をテーマとして研究を進めた。また、保育実践においては、第1ステージ（4歳児4月～2年生前期）の子どもの「やりたいことを思う存分やろうとする」姿を大切にすることを心がけた。

1. 1. 1. 「子どもの見とりと手だて」の一覧表作り

幼・小接続分科会では、連携カリキュラム作成に向けて、4、5歳児、1年生の活動の実際の様子を振り返り、「子どもの見とりと手だて」の一覧表を作った。

幼稚園のメンバーは、各担任が毎週作成している週案の記録から「子どもの実態（見とり）」「ねらい・内容」「環境構成（手だて）」を洗い出す作業を行っている。昨年度からの継続研究であるため、現在2年分のデータが蓄積された。

1. 1. 2. 「連携カリキュラム」の作成を目指して

本年度、幼稚園では、第1ステージのうち、ステップ1（4歳児前期）とステップ2（4歳児後期～1年生前期）にあたる幼児期に関して、具体的な指導の手だての手がかりとなる「連携カリキュラム（期ごとの指導計画）」を作成中である。幼児期2年を7期に分け、本年度の実践を基に、期ごとの活動例、環境構成をカリキュラム化しているところである。

1. 1. 3. 研究保育・公開研究会

- ・4月18日（金）竹早小教員を対象として保育を公開し、入園当初の4歳児の実態や、進級したばかりの5歳児の取り組みについて協議を行った。
- ・1月23日（金）小金井園舎、他参観者を対象とした研究保育を行い、4、5歳児の遊びの様子や保育者の関わりについて協議会をもち、本学幼児教育科教員よりカリキュラムについても指導助言をいただいた。
- ・2月14日（土）幼・小・中公開研究会では、保育を公開した。（協議会はなし）

1. 2. 成果と課題

連携研究も6年目になり、幼稚園教員も、11ヶ年を見通して子どもの育ちを見とる視点をもてるようになったことが成果としてあげられる。

ただし、作成中の幼・1年「連携カリキュラム」に関しては、幼・小の活動形態が異なること等から書式が確定していない。今後も、より使いやすく改訂を行う必要がある。

2. 小学生・中学生との交流活動

小学生との交流は、行事の他、1年生との交流、5年生と5歳児との交流等、相互の子どもにとって必要と思われる活動を設定し、成果を得た。

また、中学3年生家庭科「保育」において、4、5歳児と一緒に遊んだりお弁当を食べたりする（1回目）、遊びのお店やさんへの招待を受ける（2回目）の交流実践を行った。

（文責 井口眞美）